

2023 年 9 月

食料安全保障月報

(第 27 号)



令和 5 年 9 月 29 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 9 月食料安全保障月報（第 27 号）

目 次

概要編

I	2023 年 9 月の主な動き	1
II	2023 年 9 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「乾燥の影響を受けた豪州とカナダの生産動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

「豪州の食料事情②：消費者トレンドと様々な食品表示」

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の冬小麦の播種が開始され、播種進捗率はほぼ平年並み
	＜カナダ＞	2023/24 年度の生産量(AAFC)は前年度に比べ 13.1%減の 29.8 百万トン
	＜豪州＞	2023/24 年度の生産量は前年度比 34.5%減の 26.0 百万トン
	＜EU27＞	ポーランド、ハンガリー、スロバキアはウクライナ産の輸入規制を継続
	＜中国＞	2023/24 年度の生産量は、137.0 百万トンと史上 2 番目
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は前月より上方修正され史上最高の 49.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は前月に比べ上方修正され 22.5 百万トン
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	生産量が上方修正され、史上 2 番目の豊作見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の夏とうもろこしの作付は順調
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	主産地の降雨過多の影響を受けるも、生産量は史上 2 番目
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 33.5%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は収穫面積・単収の増加で前年度比 37.7%増
	＜インド＞	8 月は過去 30 年間で最も乾燥し、カリフ米の生産量は減少見込み

- <中国> 一期作稲、南部の二期作晩稲の生育は順調
- <タイ> 今後の乾季米向け灌漑用水の不足から減産の見込み
- <ベトナム> 北部の雨季米の生育状況は良好、南部の雨季米は収穫期

II 油糧種子

- 大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
- <米国> 単収の引下げを受け、生産量は 1.6 百万トン下方修正
- <ブラジル> 2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し
- <アルゼンチン> 2022/23 年度は、干ばつによる減産で輸入は史上最高
- <中国> 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高
- <カナダ> 作付面積の増加により、生産量は前年度から 2.7%増

- (参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・ 2 7
- (参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7
- (参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・ 2 8

【利用上の注意】

表紙写真：収穫期を迎えたデュラム小麦圃場（カナダ・アルバータ州、8 月 28 日）
 カナダは世界有数のパスタ用のデュラム小麦生産・輸出国
 ウィル・バンラッセル氏撮影

(概要編)

I 2023 年 9 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では冬小麦等が収穫期、とうもろこしや大豆等の作物が成熟期から収穫期を迎えている一方、南米では 2022/23 年度のとうもろこし等が収穫期を迎えている。

品目別にみると、9 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の被害を受けたインドや EU 等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州やロシア等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については 7 月 17 日にロシアが離脱を表明。EU 経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ロシア等で減産となるものの、米国や EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で減産となるものの、今後作付けが行われる南米で前年度の干ばつから回復し、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、エルニーニョなどの天候の影響を受け生産量が下方修正されており、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、7 月の 124.0 から、8 月(最新値)は 121.4 に下落（参考：2022 年 8 月 137.6、2021 年 8 月 128.0、2020 年 8 月 95.9）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 9 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023 年 9 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の9月見通しによれば、2023/24年度の小麦の生産量は、史上最高の単収見通しを受けて、前月から上方修正され2,250万トン（対前年度比4.7%増）。とうもろこしの生産量は、天候に恵まれ上方修正され2,800万トン（同3.7%増）。輸出量は黒海穀物イニシアティブの停止はあるものの、小麦は上方修正され1,100万トン（同36%減）、とうもろこしは前月から変更なく1,950万トン（同30%減）（参考1）。

一方、ウクライナ農業政策食料省の8月10日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は天候に恵まれ7,670万トンと、2022/23年度の7,618万トンより1%増となる見通し。他方で、ロシア侵攻以前において過去最高だった2021/22年度（1億600万トン）と比較すると28%減。

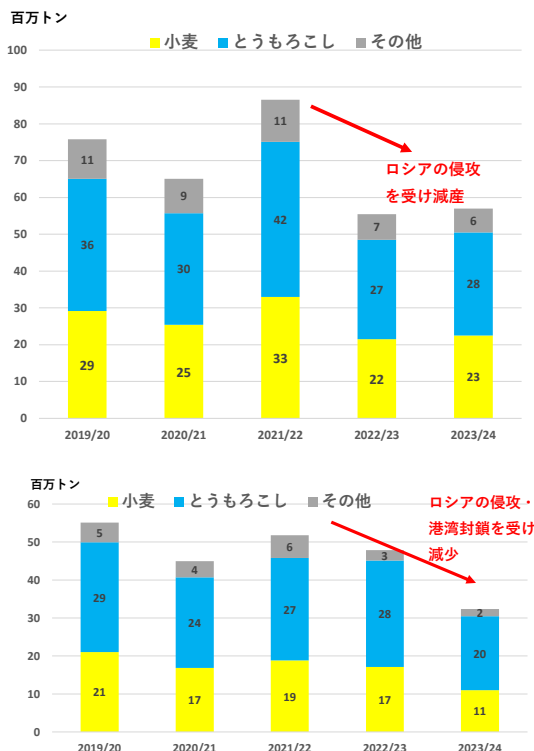
ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年9月15日時点で小麦は2,215万トン収穫された。とうもろこしは9月以降収穫が開始され、同日時点で6万トンである。

黒海穀物イニシアティブ停止後の動向（7月17日にロシア離脱で停止）

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意により、穀物等3,283万トンが輸出されたが、2023年7月17日にロシアの離脱で停止。その後、再開については決定されていない。

一方、代替輸出ルートとして、ドナウ川沿いの運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。その他のルートについても検討されているが、コストの問題等もあり、4者合意の下での輸出量全てを代替することは難しい状況となっている。

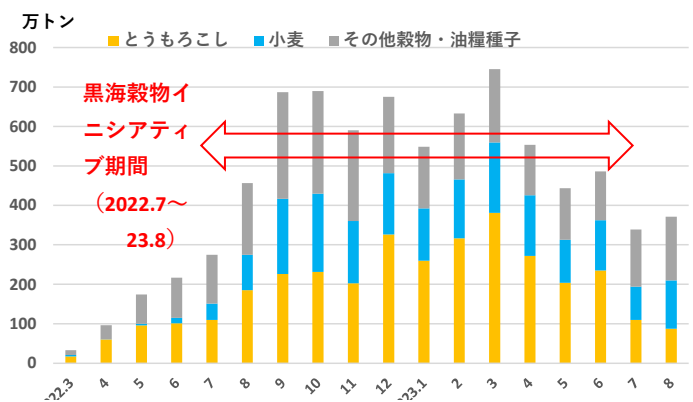
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.9）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022.8～23.7）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。陸路による輸出を除く。

1 EUはウクライナ産穀物の輸入規制を解除も一部の東欧諸国は反発

「黒海穀物イニシアティブ」は、7月17日にロシアが離脱を表明し停止。それ以降、ロシア側は、イニシアティブと同時に締結された「ロシア産の食品及び肥料の世界市場への展開についての協力に係るロシア連邦と国連事務局の間の相互理解に関するメモランダム」にある輸出への障害の除去が履行されていないとの従来の立場を繰り返してきた。9月4日にロシアのソチで開催されたプーチン大統領とトルコのエルドアン大統領との首脳会談において、ロシア側はロシア産小麦をトルコで加工しアフリカ諸国へ無償で送付することに同意したと公表した。しかし、ロシアの同イニシアティブへの復帰については進展がなかった。

一方、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU経由の陸路等による代替輸出ルートでの拡充を試みている。しかし、ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナとEUで異なる等のインフラの制約もある。なお、EUによる東欧5か国向けのウクライナ産穀物輸入禁止については9月15日以降解除されたが、ポーランド、ハンガリー、スロバキアは独自に輸入を禁止している。ウクライナ産農産物の自国への流入に対する強い反発もあり、イニシアティブ実施期間中の3,283万トン（2022年8月～2023年7月）全てを代替することは難しいとみられる。（9月15日時点）

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討されている。（France Agrimer 他より）

- 1 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
⇒現実性の高いルートとみられる
- 2 ポーランドを経由し、バルト海のグダニスク港等経由で輸出
⇒遠距離でコスト高も年間1000万トン可能としている。
- 3 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



2 米国のとうもろこし生産量引上げ、大豆は引下げ

米国農務省（USDA）の9月穀物等需給見通しによれば、今年度第2回目の作柄実地調査を受け、成熟期を迎えたとうもろこしの生産量は、収穫面積の引上げにより前月より59万トン上方修正され3億8,442万トン（前年度比10.2%増）となり、2015/16年度に次ぐ史上2位となる見通し。一方、落葉期を迎えた大豆の生産量は単収の引下げにより161万トン下方修正され1億1,284万トン（前年度比3.0%減）の見込み。また、春小麦を収穫中の小麦は、前月から変更なく、前年度比5.1%増の4,720万トンと見込まれている。

輸出については、とうもろこし、大豆ともブラジルの後塵を拝している。アジア向けの輸出に関しては、降雨不足によるパナマ運河の水位低下を受け、アフリカ喜望峰経由で輸出できるブラジル産と比べて輸出競争力が更に低下する可能性があるとみられる。小麦は、前年度の豊作により潤沢な供給力を確保しているロシア産小麦の輸出競争力が強い。

期末在庫率は9月見通しで、とうもろこしは15.4%（前年度10.6%）に引き上げられたものの、大豆は5.2%（同5.8%）に引き下げられた。一方、小麦は33.6%（同30.7%）で据え置かれた。とうもろこし、小麦の在庫は回復しつつあるが、大豆は1ケタ台の低水準で推移している。

3 インドのコメ輸出規制、更に強化

インドは、国内の穀物価格のインフレを抑制するため、7月20日のバスマティ及びパーボイルド米以外の精米の輸出禁止に加え、8月25日から10月16日までの間、パーボイルド米の精米についても20%の輸出税を賦課することとした。さらに8月27日から、バスマティ米の精米に1,200ドル/トンの最低輸出価格を導入した。

これら一連の措置により、インドのコメ輸出量の8割が輸出規制の対象になった。ただし、輸入国の食料安全保障上必要な場合などは輸出が例外的に許可されることがある。

こうした輸出規制等の背景には、国内の食料品価格高騰のほかに、北西部の降雨過多や東部の降雨不足、本年12月～翌年1月の地方選挙、及び翌年4～5月の国政選挙等を意識した動きも影響しているとみられる。

インド産米はアジア・アフリカ諸国に広く輸出されており、輸入国や他のタイ、ベトナム等の輸出国への影響等、国際貿易への影響について今後の動向に引き続き注視が必要。

<昨年からのインドの米麦の規制の経緯>

2022年5月 小麦輸出禁止

9月 碎米輸出禁止

バスマティ・パーボイルド米以外の精米に輸出税20%賦課

2023年7月 バスマティ・パーボイルド米以外の精米の輸出禁止

8月 パーボイルド米（精米）に輸出税20%賦課（同年10月16日まで）
バスマティ米（精米）に、1,200ドル/トンの最低輸出価格を導入

II 2023 年 9 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、8 月末、210 ドル/トン前後で推移。9 月に入り、豪州での降雨不足等から 210 ドル/トン台前半に値を上げたものの、相対的に価格が高い米国産の需要低迷、ロシア産の輸出増加見通しから 200 ドル/トン半ばに値を下げた。その後、ウクライナ産の輸出量が前年度に比べ急減したこと等から値を上げ、9 月半ば現在、200 ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、8 月末、180 ドル/トン台前半で推移。9 月に入り、米国中西部での乾燥予報等から 180 ドル/トン台半ばまで値を上げたものの、9 月米国農務省需給報告で米国産の生産量が上方修正されたことから値を下げ、9 月中旬現在、180 ドル/トン台前半で推移。

コメは、8 月末、660 ドル/トン台前半で推移。9 月に入り、インドの非バスマティ米の精米の輸出禁止措置（7 月 20 日～）に加え、ミャンマーの輸出規制（9 月 1 日～）でタイ産米等への需要が集中し、価格が高騰したことによる需要停滞等から値を下げ、9 月中旬現在、630 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、8 月末、490 ドル/トン台後半で推移。9 月に入り、米ドル高等から 490 ドル/トン台半ばに値を下げた。その後、中国向け輸出成約の上昇で値を上げたものの、9 月米国農務省需給報告で米国産の生産量の下方修正が市場予想を上回ったことから値を下げ、9 月中旬現在、490 ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 1.9% 増の 28.0 億トン。消費量は、前年度より 1.0% 増の 28.0 億トン となり、3 年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率は、前年度を下回り 27.3% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.0 億トン の見込み。

消費量は、前年度より、小麦、コメで減少も、とうもろこしで増加し、穀物全体で増加となり、28.0 億トン の見込み。

貿易量は、前年度より、とうもろこしで増加も、小麦、コメで減少し、穀物全体で減少し、4.9 億トン の見込み。

期末在庫量は、7.7 億トン と前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

（注：数値は 9 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.6 億トン。消費量は前年度を上回り 6.4 億トン となり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 21.1% となる見込み。

（注：数値は 9 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：乾燥の影響を受けた豪州とカナダの生産動向

エルニーニョ現象の影響を受け、生産量が過去3年連続の豊作から平年並みとなる豪州や、同じく高温乾燥の影響を受け、豊作だった前年から生産量が平年並みとなるカナダの小麦や菜種などに関し、それら品目の生産・輸出動向と世界の穀物貿易への影響についてまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、豪州の小麦は2023年10月から2024年9月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 豪州の生産・輸出動向

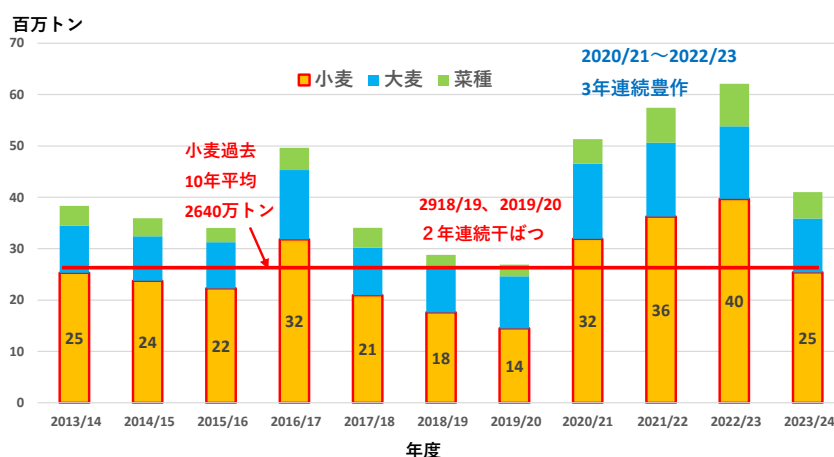
(1) 生産動向

豪州農業資源経済科学局(ABARES)の「Australian Crop Report」(2023.9.5)によれば、2023/24年度の冬穀物・油糧種子の生産量は、エルニーニョ現象による乾燥の影響を受けて合計で4,520万トンと、過去最高であった前年度より34%減となり、過去10年平均(4,640万トン)をわずかに下回る見通し。

特に、小麦については、2,540万トンと対前年度比36%減も、過去10年平均との対比では4%減に留まる。州別では、ウェスタンオーストラリア州が北部地域の乾燥の影響で850万トンに減産(対前年度比39%減)となり、ニューサウスウェールズ州も同じく北部地域の乾燥の影響で660万トンに減産(対前年度比36%減)の見通し。

大麦についても、乾燥の影響を受けて1,050万トンに減産(対前年度比26%減)となるも、過去10年平均との対比では6%減に留まる。菜種も同様に乾燥の影響を受け、520万トンに減産(対前年度比38%減)となるも、過去10年平均は上回る見通し。

図1 豪州の小麦・大麦・菜種の生産量の推移



出典：豪州農業資源経済科学局「Australian Crop Report」(2023.9)

図2 豪州の土壌水分量平年対比



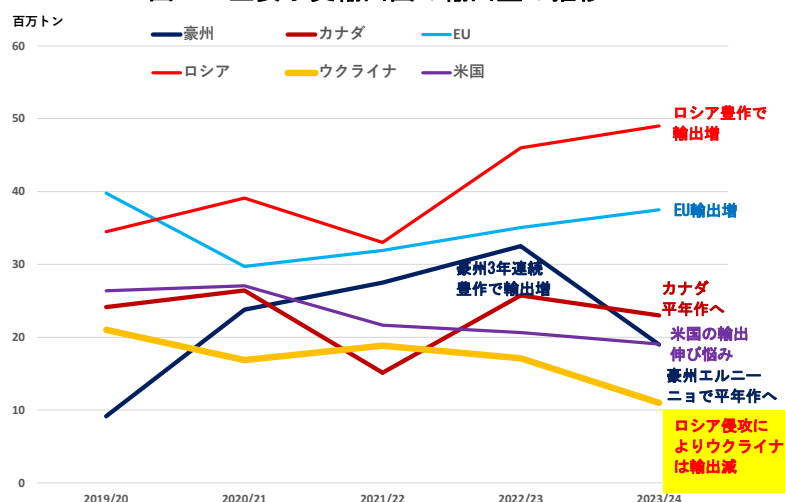
出典：JASMAI (<https://jasmai.maff.go.jp/>)：衛星データを活用し、世界の気象状況を可視化

(2) 輸出動向

小麦輸出に関しては、過去3年間の豊作に加え、ロシアの侵攻によるウクライナの輸出減に伴う豪州産への引き合いが強いこともあり、輸出量が大きく増加した。米国農務省（USDA）の9月見通しによれば、2023/24年度は、前年度より42%減少するものの1,900万トンと4年前の水準を大きく上回っている。

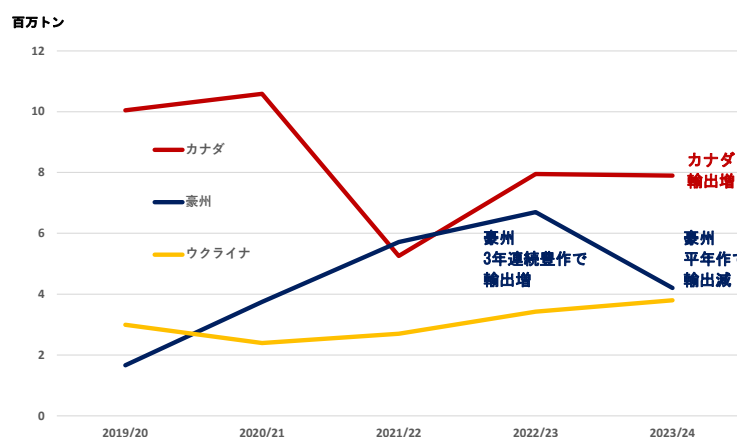
菜種輸出に関しても、小麦同様、過去3年間の豊作を受け輸出余力が増加した。小麦と同様に、2023/24年度は、前年度より37%減少するものの、420万トンと4年前の水準を大きく上回っている。

図3 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.9）を農林水産省で加工

図4 主要菜種輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.9）を農林水産省で加工

2 カナダの生産・輸出動向

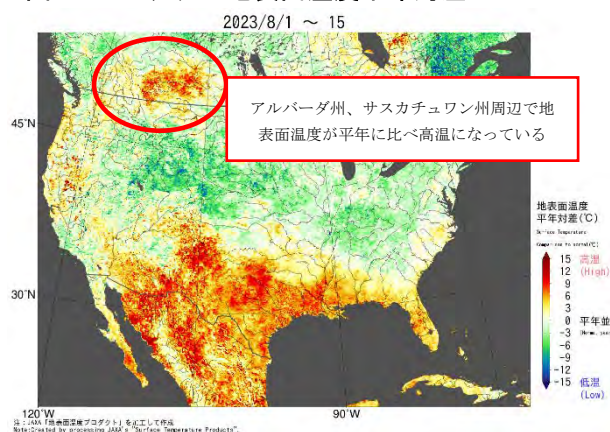
(1) 生産動向

カナダ統計局の「Model-based principal field crop estimates, August 2023」

(2023.9.14)によれば、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は、主にカナダ東部で生産されとうもろこしや大豆で増加するものの、カナダ西部の平原州で生産される小麦や菜種について、乾燥の影響を受けて減産となる見通し。

とうもろこしについては、対前年度比3%増の1,490万トンとなり、収穫面積の増加が寄与している。州別には、米国のコーンベルトに隣接している最大生産州のオンタリオ州が増産となっている。大豆についても、対前年度3%増の670万トンとなり、とうもろこし同様に収穫面積の増加が寄与している。州別には、最大生産州のオンタリオ州の生産量は前年並みも、隣接するケベック、マニトバ州で増加している。

図5 カナダの地表面温度平年対差



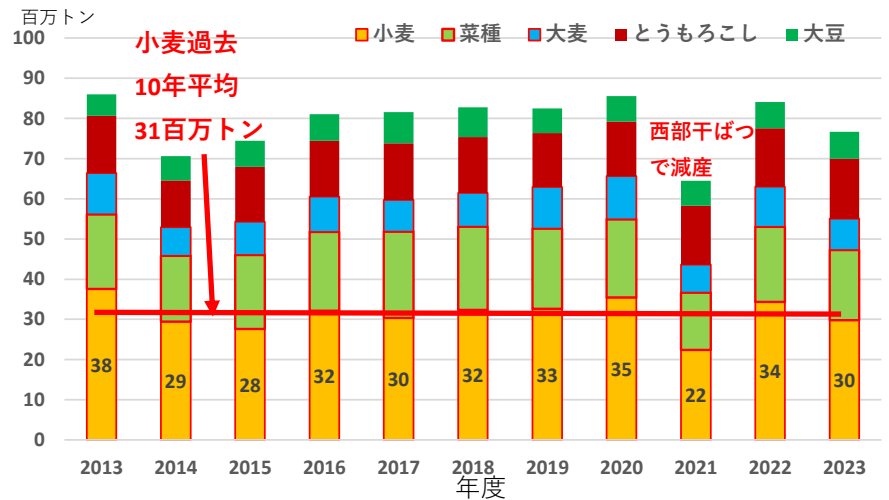
出典：JASMAI (<https://jasmai.maff.go.jp/>) 衛星データを活用し、世界の気象状況を可視化

一方、小麦については、対前年度比 13%減の 2,980 万トンと減少する見通し。中でもデュラム小麦は、410 万トンと対前年度比 30%減と大きく減少する見通し。収穫面積が増加するも、乾燥による単収の低下が減産の要因。特に、最大生産量州のサスカチュワン州の減産（18%減）が顕著である。

大麦についても同様に、対前年度比 21%減の 790 万トンの見込み。収穫面積が増加するも、単収が低下することが要因。

菜種についても同様に、対前年度比 7%減の 1,740 万トンとなる見通し。小麦や大麦と同様に、収穫面積が増加するも、単収が低下することが要因。州別には、平原州のアルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州とも減産見通しとなっている。

図6 カナダの主要穀物・油糧種子生産量の推移
赤枠の品目は主にカナダ西部にて栽培



出典：カナダ統計局「Model-based principal field crop estimates, August 2023」(2023.9)

(2) 輸出動向

小麦や菜種については、主産地がカナダ西部であるため、主に我が国や中国、東南アジア等のアジア向けは、ロッキー山脈を鉄道で超え、太平洋岸の南部にあるバンクーバー港や北部のプリンスルパート港などから出荷される。他方、欧州向けは、五大湖から大西洋経由で出荷されている。また、大豆については、主産地がオンタリオ州東部のため、五大湖から大西洋を経て、さらにアジア向けはパナマ運河経由で出荷される。

小麦については、2021/22 年度は干ばつによる減産を受け輸出量が減少した一方、2022/23 年度は天候に恵まれ増産となり輸出量も回復した。2023/24 年度は、米国農務省 (USDA) の 9 月見通しによれば 減産による供給減を受け、2,300 万トン（対前年度比 11%減）となっている。

一方、菜種については、2023/24 年度の輸出量は、2023/23 年度からの持越在庫からの供給もあり、USDA の 9 月見通しによれば、前年度並みの 790 万トンとなっている。また、大豆については、増産による供給増から、輸出量は 455 万トン（対前年度比 7%増）と増加し、ブラジル、米国、パラグアイ、アルゼンチンに次ぐ世界第 5 位の輸出国となっている。

3 世界の穀物貿易への影響

(1) 小麦

2021/22 年度は、干ばつの影響により減産となったカナダの生産量を補う形で、ラニーニャによる降雨の恩恵を受け 2 年連続豊作となった豪州がカバーした。

2022/23 年度は、豪州が 3 年連続豊作で史上最高を更新し、また、カナダも過去最高に迫る豊作となり、両国の輸出も好調に推移したことを受け、ロシアのウクライナ侵攻によ

る国際需給のひっ迫への影響を緩和してきた。

しかし、2023/24 年度については、両国とも過去 10 年平均レベルまで生産量が減少する見通しである。小麦については、現時点では、2023/24 年に史上最高の豊作となったロシアが 2023/24 年度も潤沢な在庫を背景に輸出競争力が強く、輸出量は 4,900 万トンと見込まれており、小麦相場も 5 ドル台後半から 6 ドル台と以前の価格高騰時と比べて落ち着いた動きを見せている。全体の数量ベースみれば、カナダ、豪州による輸出の減少分をロシアがカバーした形となっている。しかし、カナダ・豪州産とロシア産では蛋白含有量等品質に相違があり、カナダ・豪州産はアジア向けが中心である一方、ロシア産はアフリカ、中近東向けが中心となっており、中国の輸入動向にもよるが、カナダ・豪州両国とも一定の輸出市場を確保していくとみられる。

(2) 菜種

カナダは、世界貿易に占めるシェアが 45%と輸出首位で影響力が大きいですが、過去 3 年間は輸出シェア第 2 位の豪州が豊作により輸出量を伸ばし、ロシアの侵攻の影響を受けた第 3 位のウクライナの輸出減少分をカバーしてきた。

しかし、2023/24 年度については、両国とも小麦同様、過去 10 年平均レベルまで生産量が減少する見通しである。減少分については、中国の油糧種子増産政策や EU の 2023/24 年度の菜種増産による輸入減、史上最高の豊作を更新してきたブラジル産大豆等他の油糧種子への代替でカバーされるとみられる。

(3) パナマ運河の影響

エルニーニョによる降雨不足を受けたパナマ運河の水位低下についても 6 月頃から報道されており、9 月に入り通航制限が強化され、20 日間滞船との報道もされている。

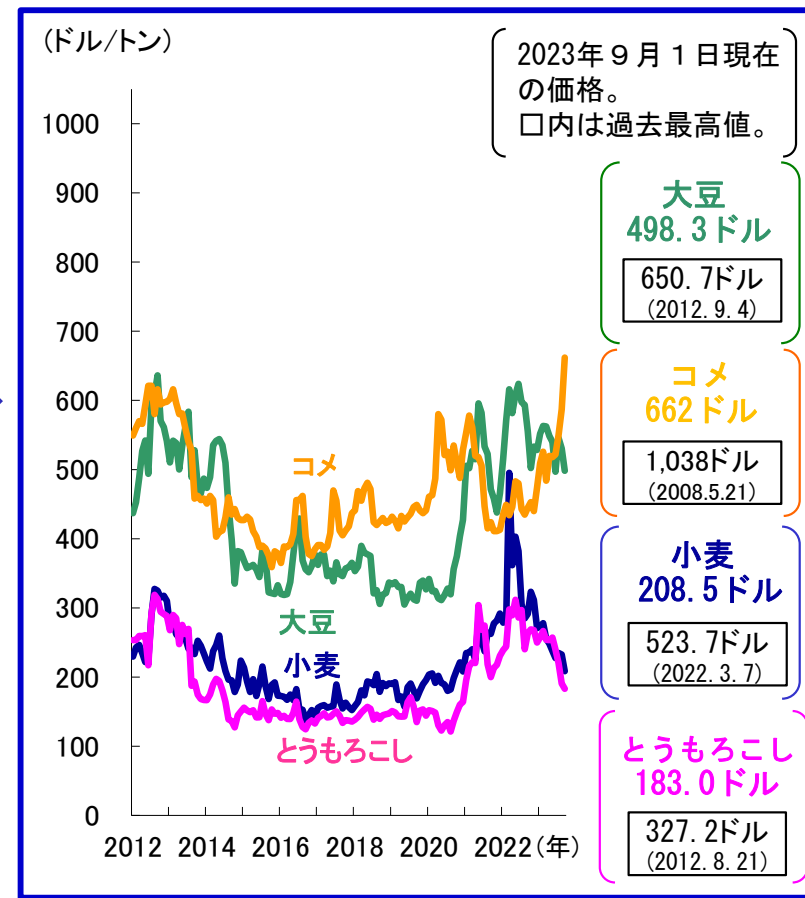
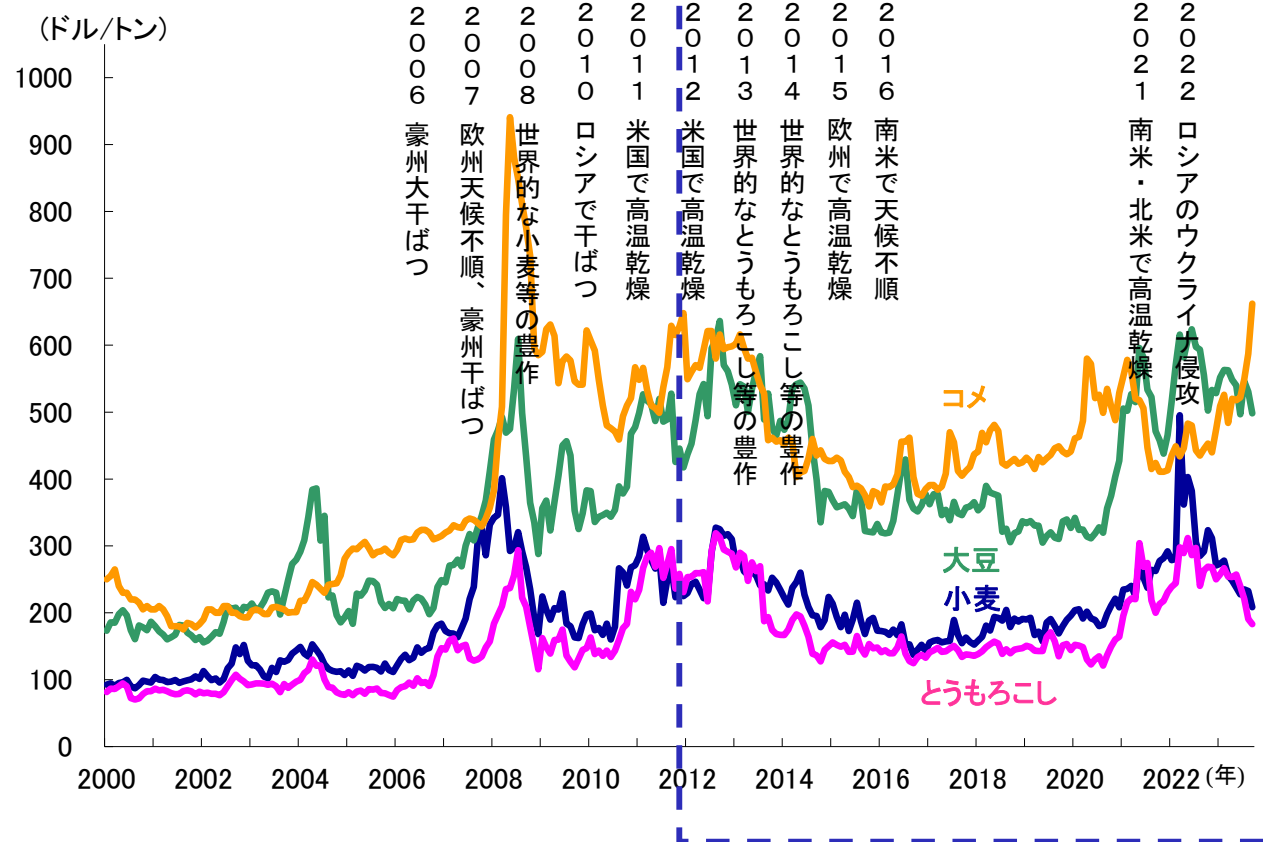
こうした中で、北米等からの穀物等の輸出への影響が懸念されているが、我が国向けの豪州産小麦や菜種、太平洋岸から出荷されるカナダ産小麦や菜種、米国産小麦は、いずれもパナマ運河を経由しないため、影響はほとんどないとみられる。

一方、大西洋岸から輸出されるカナダ産大豆のほか、メキシコ湾岸から出荷される米国産とうもろこし、大豆は、我が国向けにはパナマ運河を通過して輸送されており、引き続き、パナマ運河を経由して輸送される穀物等の貿易動向にどう影響を与えるか今後とも注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆は、アルゼンチンの干ばつから依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制やインドネシアの需要増、2023年7月からのインドの輸出規制の強化から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



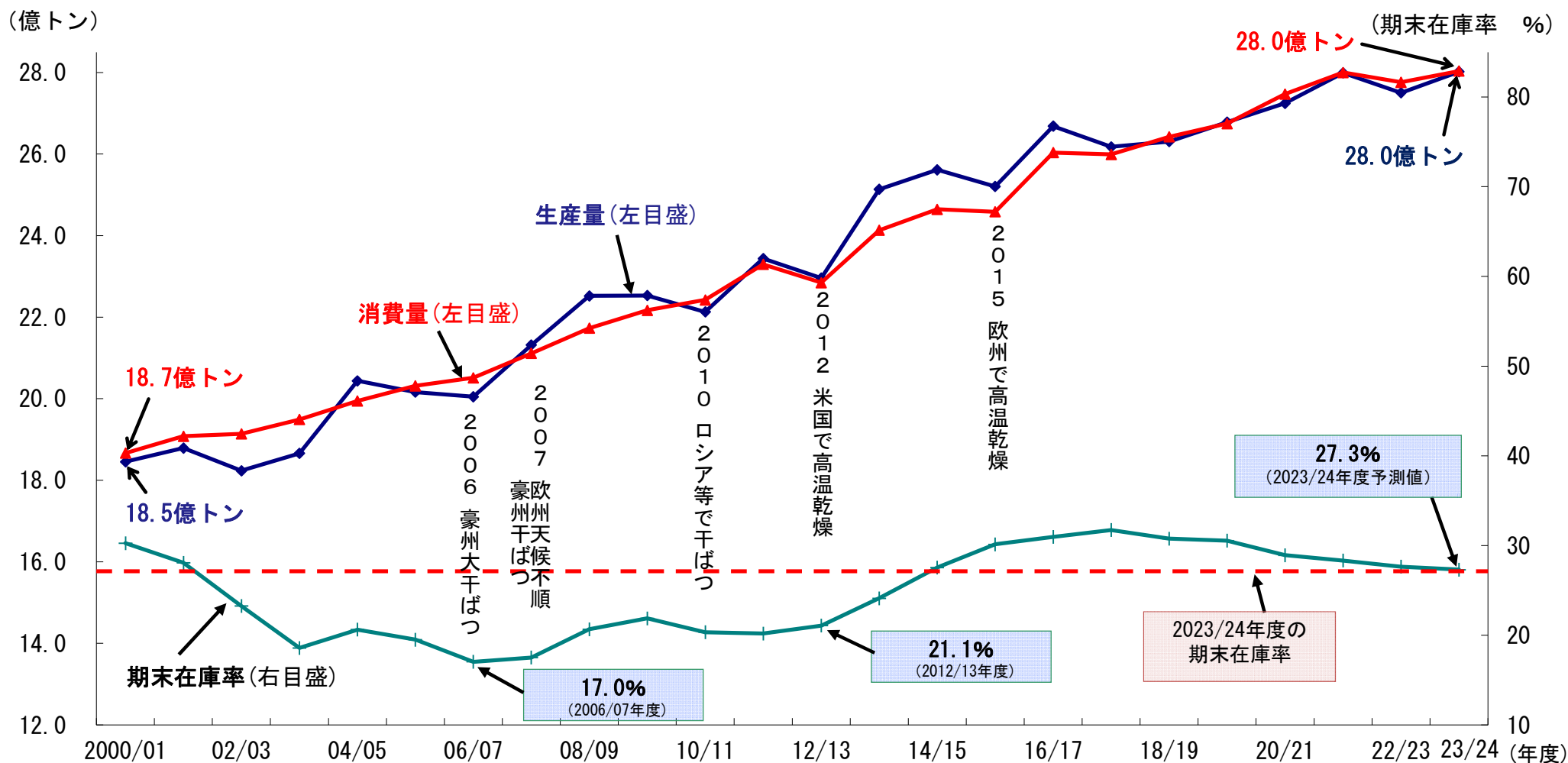
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメ価格は、8月30日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.3%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

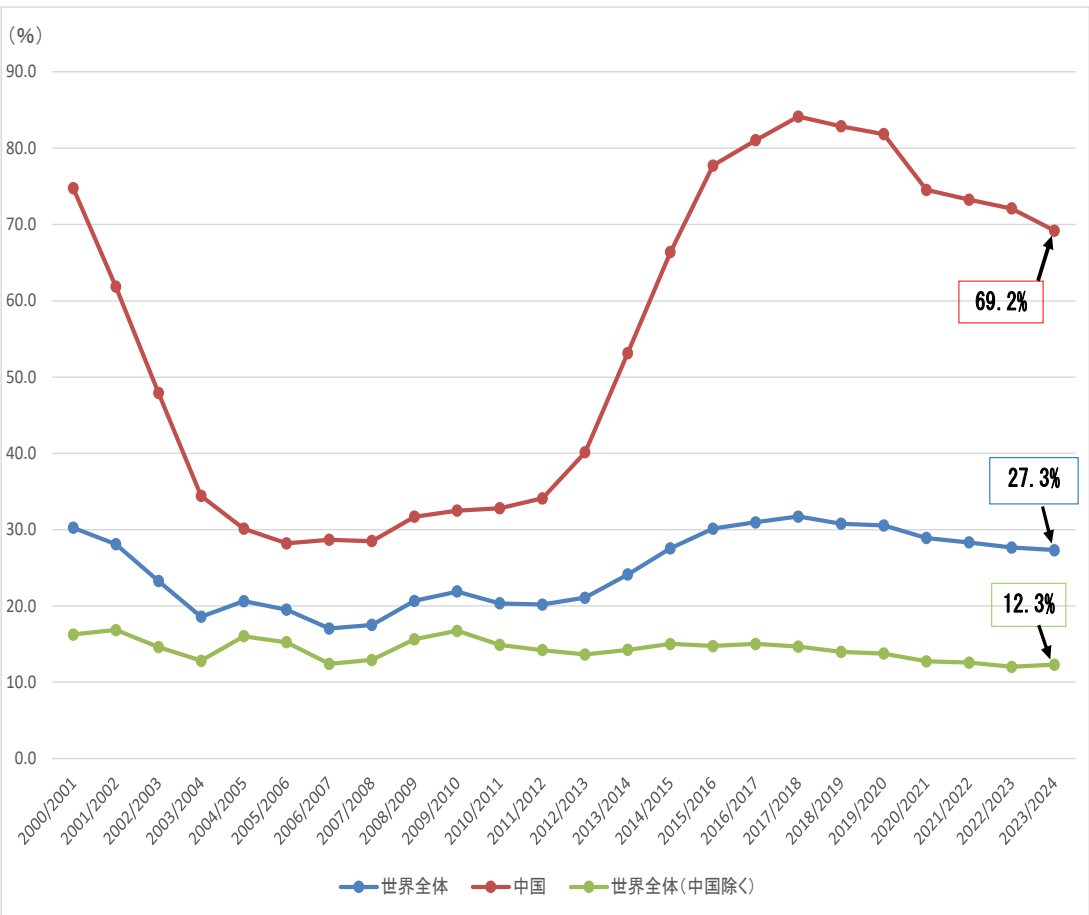


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(September 2023)、「PS&D」

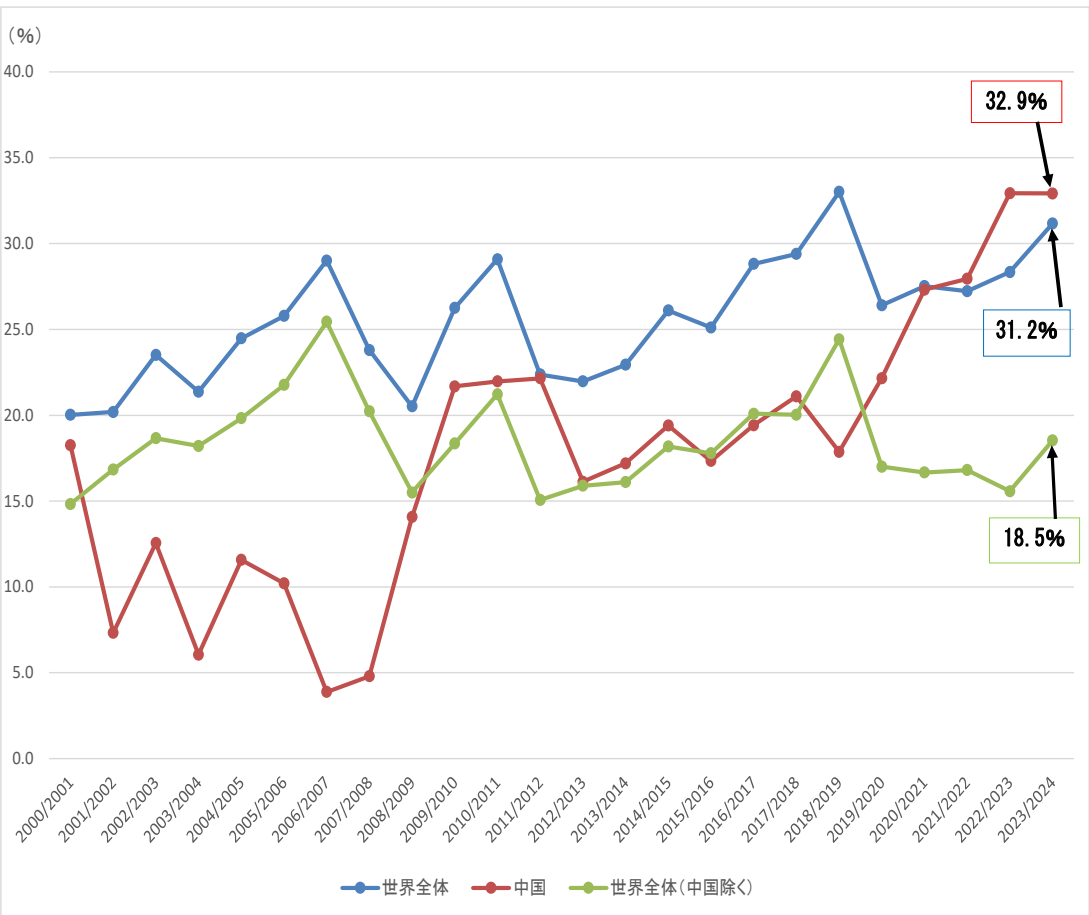
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(September 12, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

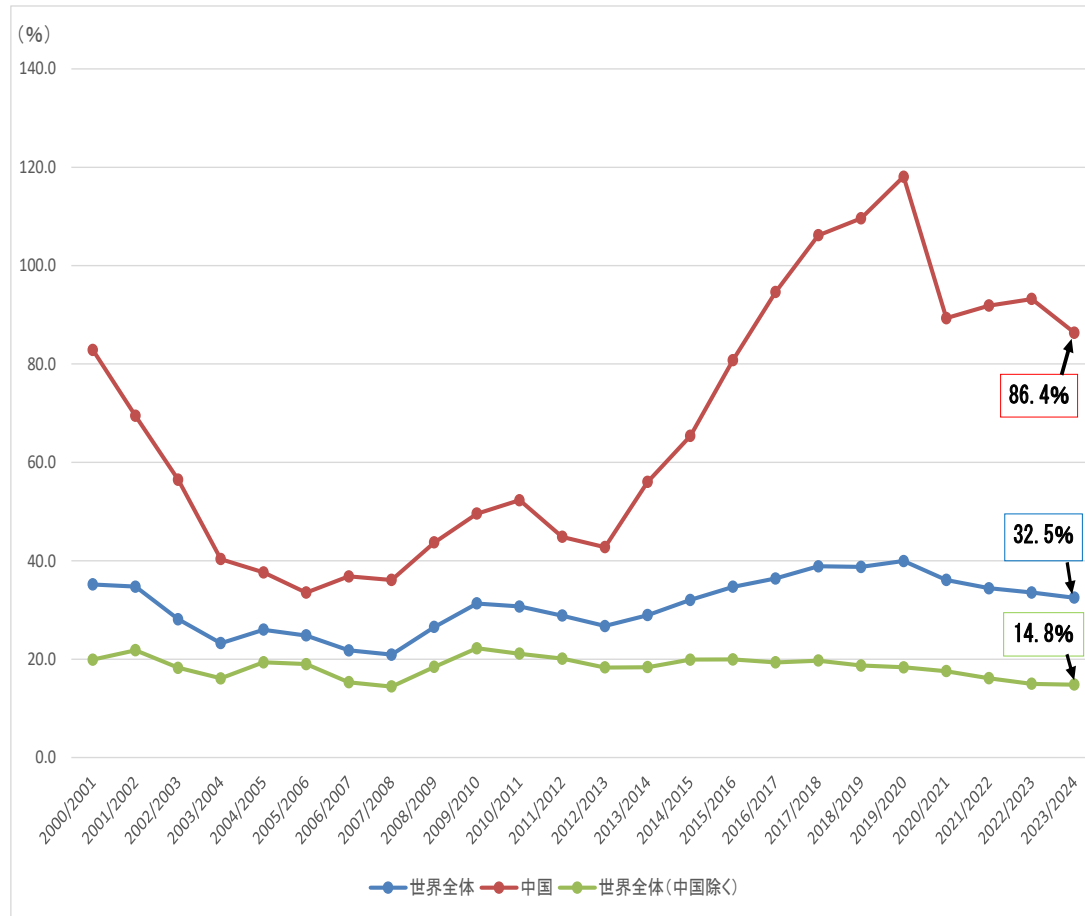
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

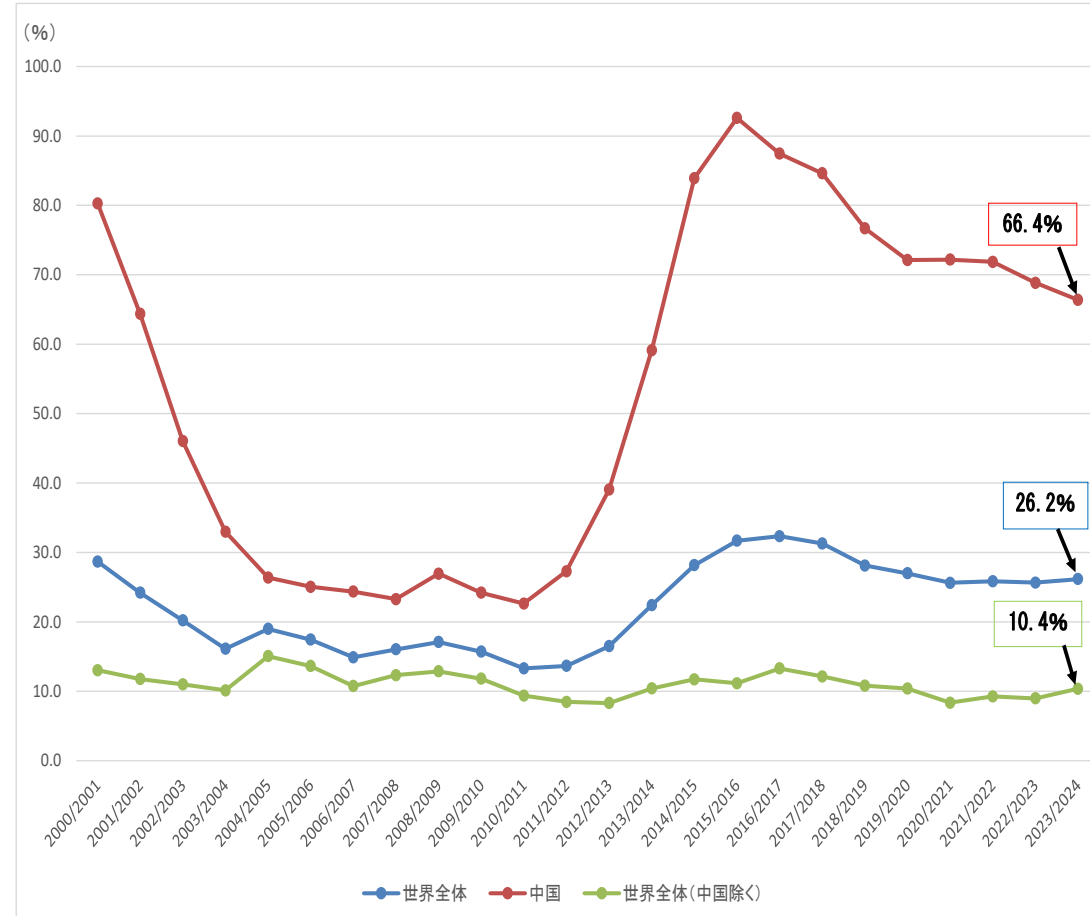
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(September 12, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

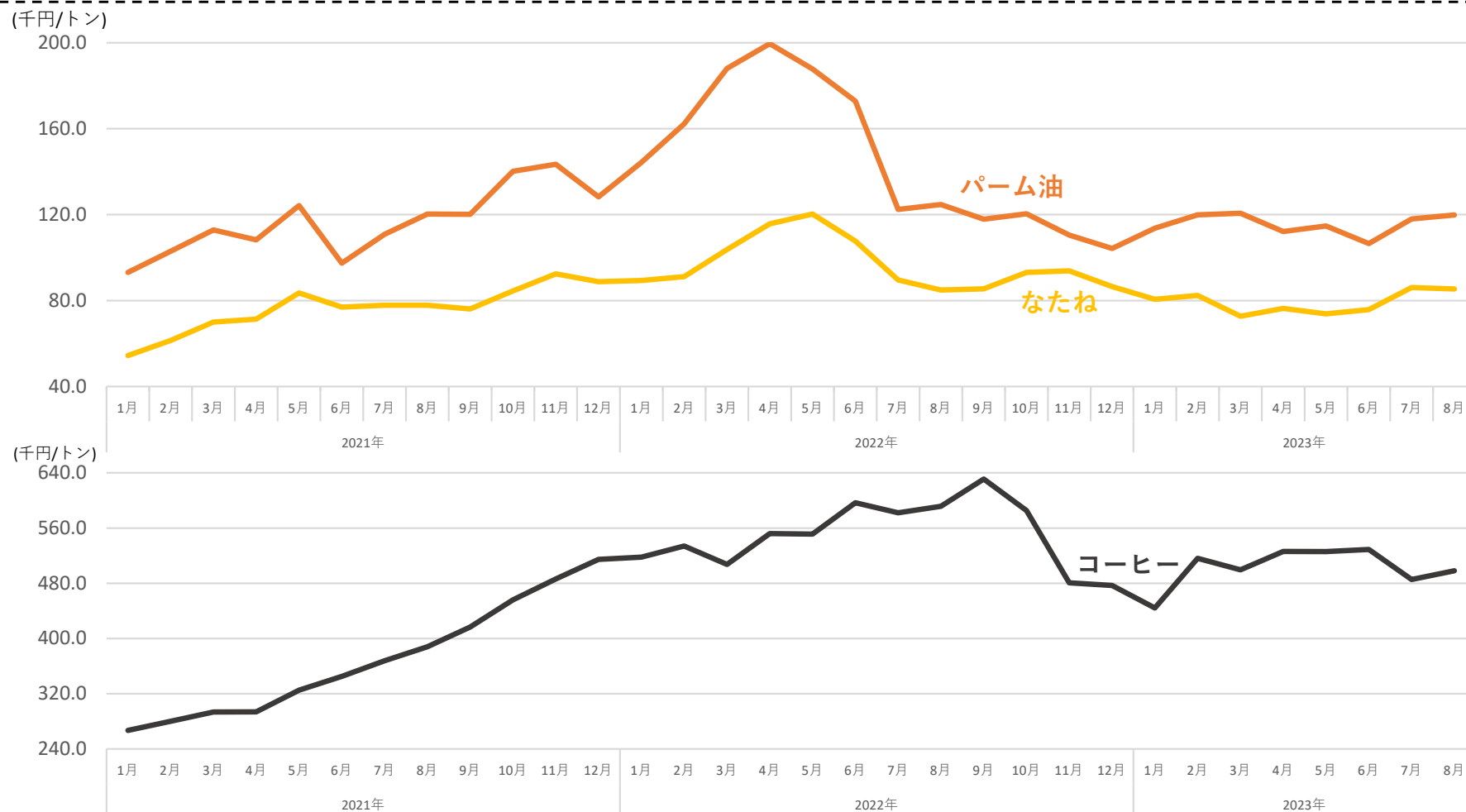
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2023年9月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
119.8 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
85.5千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

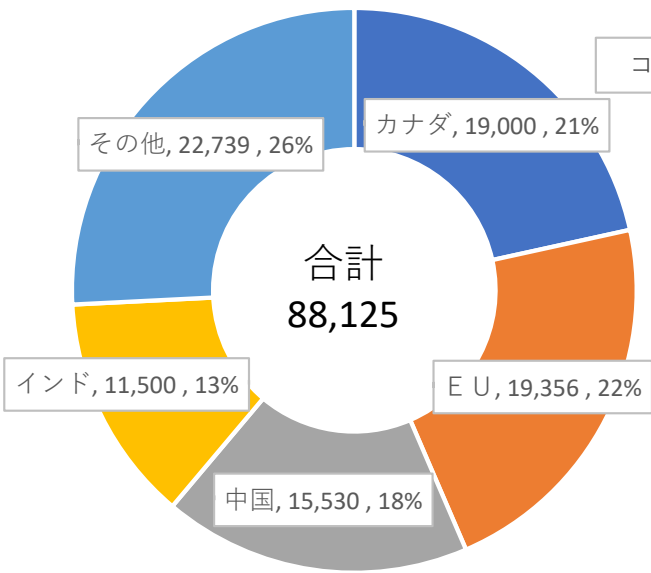
コーヒー
498.1千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

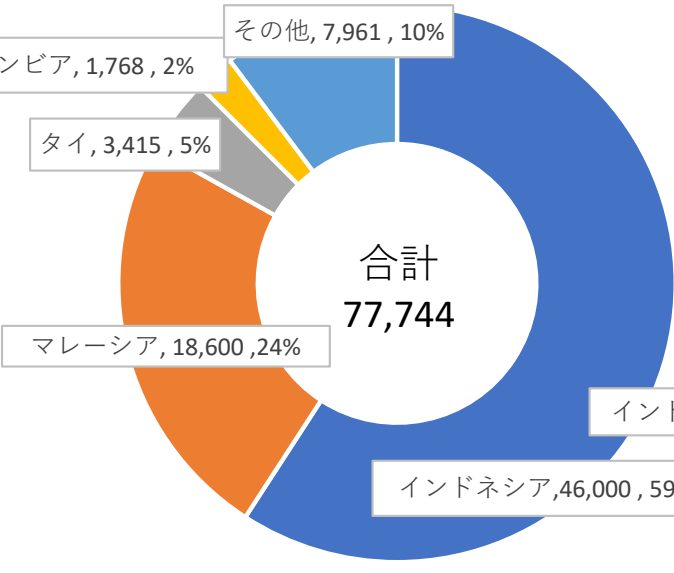
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



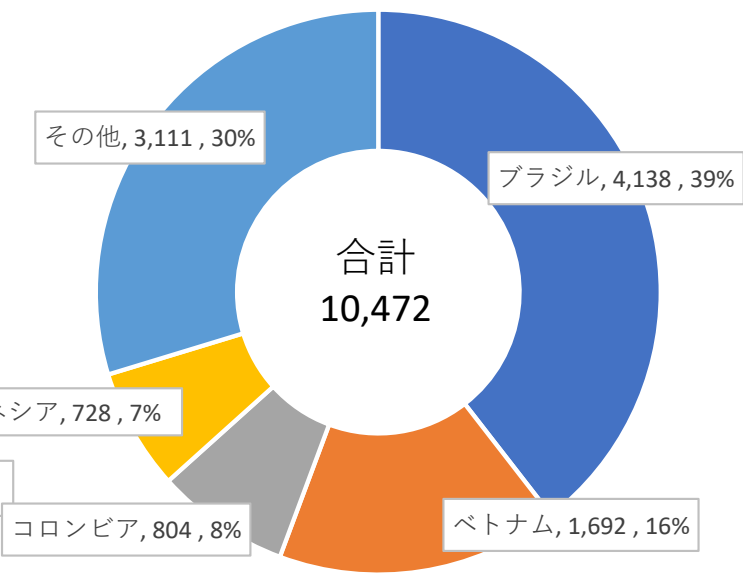
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年8月の国内の加工食品の消費者物価指数は107.5～158.8（前年同月比で5.6%～27.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年1月～令和5年8月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	115.0	115.0	114.3	114.8	115.3	115.0	121.3	122.9	7.5%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	113.1	114.6	113.1	113.9	111.4	124.3	125.5	125.8	9.5%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	110.3	110.4	112.0	114.5	114.6	115.2	115.1	115.9	10.3%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	164.0	163.9	164.3	163.0	164.1	162.1	160.3	158.8	5.6%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	104.5	105.9	106.5	107.1	107.7	107.7	108.0	107.5	7.5%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	137.3	137.2	139.0	148.6	152.3	153.0	153.9	155.7	23.1%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	119.2	121.4	121.9	133.9	134.5	134.8	134.7	136.2	27.8%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.6	98.6	98.9	109.8	111.2	111.4	112.3	112.2	12.8%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	108.7	109.4	110.2	111.6	112.1	112.7	113.4	113.8	9.2%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年1月～令和5年9月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5									
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.5	110.7	111.3	111.3	111.3	111.3	116.5	118.6	118.2	6.8%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	111.2	110.6	110.6	111.8	121.6	122.8	122.8	121.6	10.5%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	108.5	108.1	110.2	113.7	114.1	115.0	114.6	114.6	114.1	9.5%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	162.2	162.2	161.9	161.2	161.2	160.6	160.0	158.7	158.7	1.2%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.3	103.4	103.6	105.2	105.0	105.2	105.0	105.2	105.6	3.8%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	129.6	128.9	130.3	137.9	142.7	144.4	144.1	143.7	144.1	23.3%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	116.9	118.4	117.9	129.3	130.3	130.7	130.3	130.7	130.7	21.0%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.4	108.9	110.3	110.7	111.4	111.4	110.7	12.3%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3：調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4：令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年10月号（9月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）供給減から肥育牛価格は高水準を維持、上半期の牛肉輸出量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002916.html

（豪州）と畜頭数および牛肉生産量が約3年ぶりの高水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002918.html

（ブラジル）2023年の肥育牛価格は22年に続き下落傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002919.html

◆豚肉

（米国）需要の増加から豚肉卸売価格は上昇、期末在庫も減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002920.html

（EU）豚肉生産量が減少するも、8月に入り枝肉価格は下落基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002921.html

（中国）総飼養頭数は増加に転じる中で、豚肉価格は引き続き低水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002922.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）乳製品価格の下落から、23年上半期の乳製品輸出は回復

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002926.html

（豪州）22/23年度の生乳生産量、前年度からさらに減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002927.html

（NZ）GDT平均価格が続落、20年5月以来の2900米ドル台割れ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002928.html

注）GDT価格…グローバルデイトレード価格

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）世界の生産量、期末在庫は下方修正されたものの、前年度から増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002929.html

（世界：大豆）米国減産見込みで大豆期末在庫は下方修正も、前年度比大幅増は維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002930.html

（米国）単収が下方修正されたものの、生産量は過去2番目の高水準

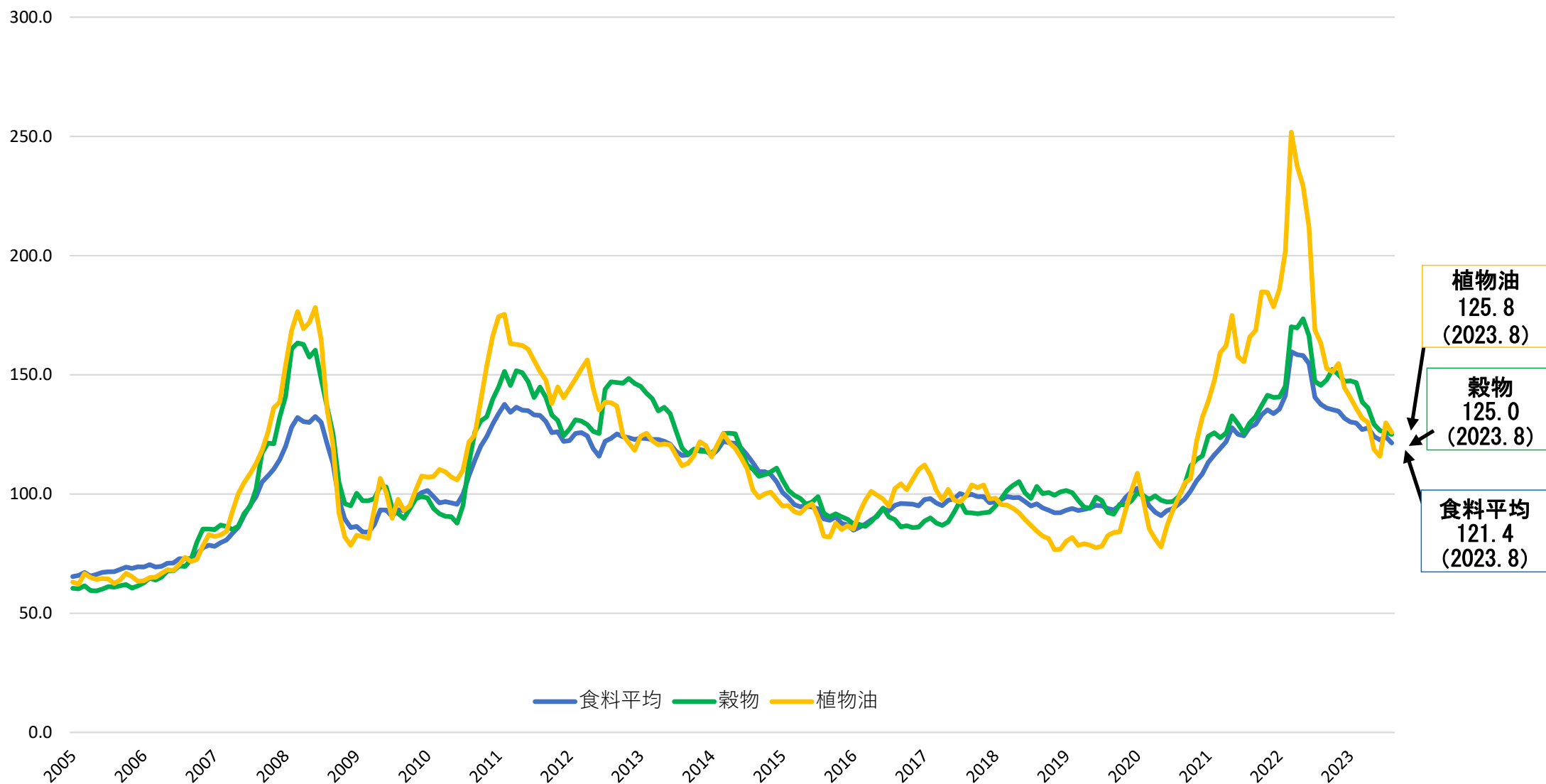
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002931.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002932.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.9)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

豪州の食料事情：消費者トレンドと様々な食品表示

前は、豪州の食料安全保障をめぐる考え方について書かせていただきましたが、今回は、豪州における食への消費者トレンドや様々な食品表示について、現地ならではの話をしたいと思います。

1. 消費者トレンド

豪州ではコーヒー文化が広く根付いており、カフェでは毎朝テイクアウトも含め、コーヒーを求める人の行列ができます。コーヒーには、乳製品や豆乳などを入れたりしますが、日本から豪州への食品輸出第

1位の品目となっている「清涼飲料水」のうち、実はコーヒーなどに用いられる豆乳が7～8割のシェアを占め、日本産の豆乳が豪州で広く親しまれています。

また、日本酒は近年豪州向け輸出が拡大しており、豪州国内では約 300 種類の日本酒が流通しているとされています。2023 年7月にメルボルンで開催された日本酒のプロモーションイベントでは、延べ約 3,000 人の豪州人が参加するなど、人気を博しています。

さらに、豪州の日本食レストランでは、客単価 300 豪ドル（約 2 万 9,000 円）以上の「OMAKASE」と呼ばれる、料理人に注文を委託する日本式フルコース料理のようなものが数年前からブームとなっていました。

しかし、コロナ後に豪州人が日本に旅行に行けるようになったことなどから、「OMAKASE」をアラカルト形式に変更するレストランも現れてきていると聞きます。これには、昨今の高いインフレ率により食品等の値段が高騰し、豪州国民の家計を圧迫しているという側面もあります。

（小売店（左）やカフェ店頭には並ぶ日本産の豆乳）



(小売最大手「ウールワース」の食品価格例 (2023 年 9 月現在))

品目	価格	
	豪ドル	日本円
牛ミンチ肉 (500g)	9.5	919
牛ステーキ肉 (500g)	23.4	2,265
鶏むね肉 (1kg)	11.0	1,065
鮭切り身 (1kg)	42.0	4,065
牛乳 (3L)	4.5	436
卵 (フリーレンジ、1ダース)	5.2	503
たまねぎ (1kg)	2.5	242
ブロッコリー (1株)	1.2	112
とうもろこし (1本)	1.0	97
人参 (1kg)	2.4	232
トマト (1個)	0.5	52
レタス (1玉)	1.9	184
バナナ (1本)	0.8	78
みかん (1kg)	3.5	339
食パン (700g)	4.4	426
ビール (6缶)	24.5	2,371

資料: ウールワースオンラインショッピングサイト

注: 1豪ドル=96.78円で換算。

(三菱UFJリサーチ & コンサルティング株式会社2023年8月末TTS相場)

2. 様々な食品表示

豪州国民は健康志向や地産地消への関心が高く、都市部には有機食品専門店があるほか、小売店の棚には様々な関連表示のある商品が多く並んでいます。

食品の安全性に関する表示基準などを定めるオーストラリア・ニュージーランド食品基準機関 (FSANZ) では、アレルゲンとしてのグルテンフリーの表示基準が定められています。オーストラリア公正取引委員会 (ACCC) では、メイド・イン・オーストラリア製品に信頼を置く消費者のための原産地表示が義務とされています。また、任意の表示として、商品パッケージに健康指数を示す表示システムが存在するほか、カーボンニュートラルやアニマルウェルフェア、有機食材に対する消費者の関心も高く、これらに関する認証機関による認証マークも様々な商品パッケージで見られます。

(小売店の有機食品コーナー (左) と有機食品専門店)



(メイド・イン・オーストラリア製品ラベル例 (義務表示))



(食品摂取における健康指数などを示すヘルススターレーティング (任意表示))



(カーボンニュートラル商品であることを示す各種表示 (任意表示))



(アニマルウェルフェアに配慮した商品であることを示す表示 (任意表示))



(有機農畜産物であることを示す各種表示 (任意表示))

ACO Certification Ltd が豪州最大の有機認証団体で、2022 年の豪州農林水産省の調査によると、国内の 74% の有機商品が同認定を取得しています (写真左上)。ACO 認定の条件は、商品の 95% が有機原材料を使用していること、禁止された化合物で処理されたものでないこと、遺伝子組み換え技術を用いていないこと、放射線照射を行っていないことなどとされています。



一方で、植物由来の食肉及び乳製品代替食品も、ファストフードチェーンの定番メニューとなっていたり、小売店の棚でも一定の面積を占めています。これら商品には、ビーガン（完全菜食主義者）にも対応した商品であることや、植物由来のたんぱく質であることが記載されていますが、一部商品にはあたかも動物由来の食肉製品や乳製品であるかのような誤解を生む可能性のある表示も散見されることから、豪州議会や豪州農林水産省、畜産関係団体の間で、分かりやすい表示に向けた規制の検討が進められています。

（ファストフードチェーンの植物由来パティを用いたハンバーガー）



(動物由来か植物由来か一見判別しづらい植物由来商品パッケージ例)



全2回で、豪州の食料安全保障の考え方や現地における消費者トレンド、様々な食品表示について紹介させていただきました。FAOによると、豪州は同国農地の10%、世界の48%の有機農地を占めるなど、有機農産物の最大生産地であり、消費者トレンドなども踏まえると、豪州の食品分野は今後、世界の健康志向や持続可能性をリードする存在になるかもしれません。豪州の一部小売店では、既に有機の味噌や白だしなどの日本産食材も販売されていますが、日本文化や日本産食品への人気を追い風に、検疫や食品添加物などの規制をクリアしつつ、日本産食材の品質の高さをアピールしていくことが、豪州への農林水産物・食品の輸出拡大に必要と考えています。

文責：赤松 大暢

(日本貿易振興機構(ジェトロ)シドニー)

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介するものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・画像出典】

- ・ウールワースオンラインショッピングサイト

<https://www.woolworths.com.au/>

- ・オーストラリア・ニュージーランド食品基準機関 (FSANZ)

<https://www.foodstandards.gov.au/consumer/labelling/Pages/default.aspx>

- ・オーストラリア公正取引委員会 (ACCC)

<https://www.accc.gov.au/system/files/Country%20of%20origin%20food%20labelling.pdf>

- ・ヘルススターレーティングシステム

<http://healthstarrating.gov.au/internet/healthstarrating/publishing.nsf/Content/home>

- ・豪州農林水産省「Organic Industry Data Collection Report 2022」

<https://www.agriculture.gov.au/sites/default/files/documents/organic-industry-data-collection-kg2-final-report-feb-2022.pdf>

・ ACO Certification Ltd

<https://aco.net.au/Pages/Certification/FoodManufacturing.aspx>

・ 豪州農林水産省「Plant-based protein product labelling」

<https://www.beefcentral.com/wp-content/uploads/2023/09/Traditional-animal-plant-based-product-labelling-questions-for-discussion.pdf>

・ FAO「Statistical Yearbook 2022」

<https://www.fao.org/3/cc2211en/cc2211en.pdf>

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・ウクライナ等で上方修正されたものの、豪州、カナダ、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

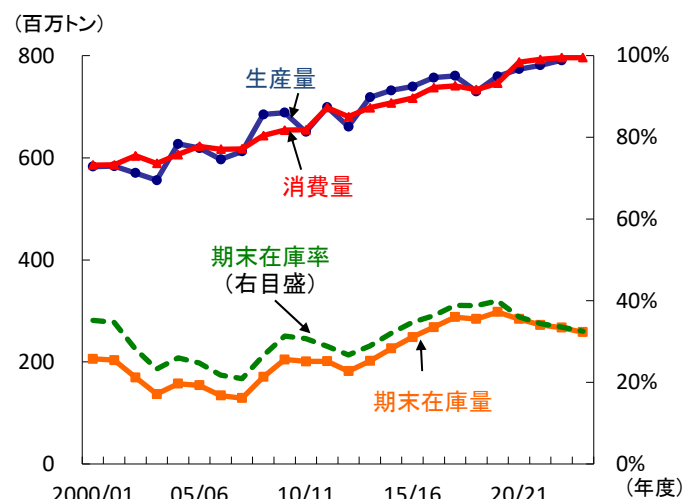
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・豪州、カナダ等で下方修正されたものの、中国、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・ロシア、カザフスタン等で上方修正されたものの、豪州、カナダ、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



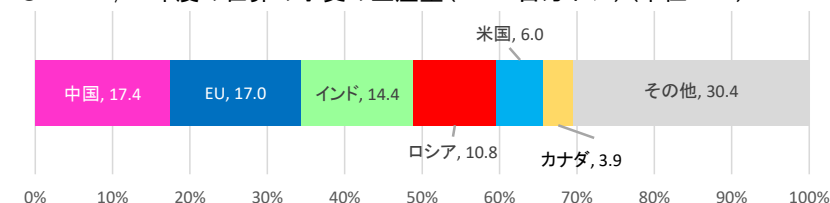
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

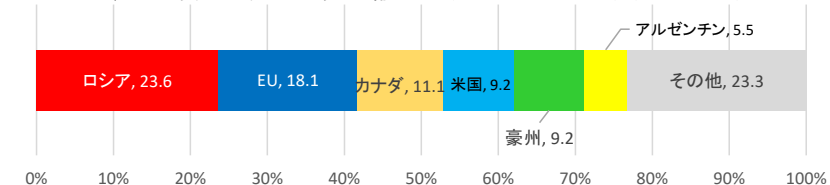
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	781.0	790.6	787.3	▲ 6.0	▲ 0.4
消 費 量	792.4	796.1	795.9	▲ 0.2	▲ 0.0
うち飼料用	161.1	156.1	157.6	1.0	0.9
輸 出 量	202.8	219.9	207.3	▲ 2.0	▲ 5.7
輸 入 量	199.5	209.5	205.6	▲ 1.8	▲ 1.9
期末在庫量	272.7	267.1	258.6	▲ 7.0	▲ 3.2
期末在庫率	34.4%	33.6%	32.5%	▲ 0.9	▲ 1.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 September 2023)

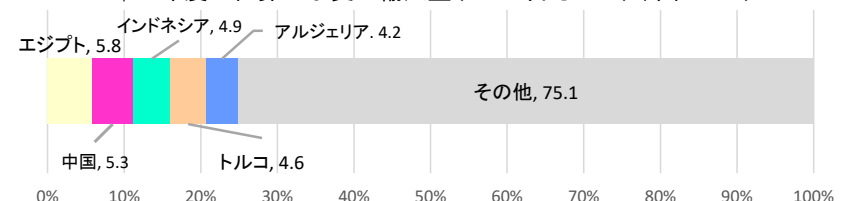
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(787.3百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(207.3百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(205.6百万トン) (単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2024/25 年度の冬小麦の播種が開始され、播種進捗率はほぼ平年並み

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 47.2 百万トンと、過去 5 年平均を 3.0% 下回るものの、前年度に比べ 5.1% 増加の見込み。

USDA「Crop Production」(2023.9.12)によれば、冬小麦、春小麦及びデュラム小麦の生産量は、それぞれ前月予測からの変更はなく、33.4 百万トン(前年度に比べ 11.2% 増加)、12.2 百万トン(同 6.8% 減少)、1.6 百万トン(同 10.3% 減)となる見込み。春小麦及びデュラム小麦の生産量の前年度からの減少は、収穫面積は増加したものの、生育期間に乾燥天候に見舞われたため、単収が低下したことによる。

USDA の「Crop Progress」(2023.9.18)によれば、主要生産 6 州の収穫進捗率が 9 月 17 日時点で、前年度同期(93%)、過去 5 年平均(93%)並みの 93% となり、春小麦の収穫は終盤を迎えた。

一方、2024/25 年度の冬小麦の播種が開始されているものの、9 月 17 日時点の播種進捗率は 15% で前年度同期(19%)、5 年平均(16%)をやや下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、19.1 百万トンと、前年度に比べ 7.7% 減少し、1972/73 年度以降で最低となる見込み。米国産は、国際市場で価格が高く競争力がない状況が継続している。このため、低調な輸出ペースとなっており、8 月末までの輸出量は前年度を下回っている。また、2023 年 8 月の輸出量も前年度同期(257.7 万トン)を下回る 158.9 万トンとなった。輸出先国は、メキシコ(22.1%)、フィリピン(11.6%)、日本(11.3%)の順である。

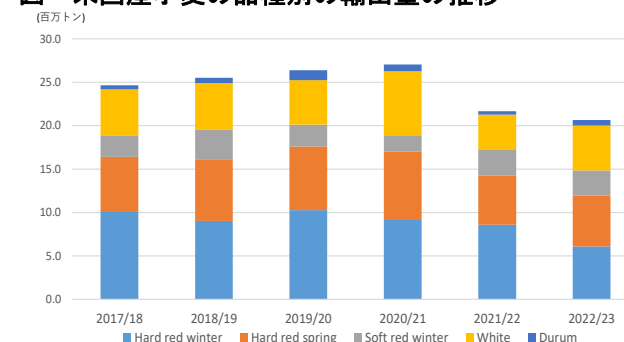
なお、低調な輸出の要因のひとつである米国産の輸出価格(HRW: FOB 価格)は、春小麦の収穫の進展と低調な輸出ペースから、9 月 8 日時点で 314 ドル/トンと前月から 8 ドル/トン下落したものの、主要輸出国である豪州(312 ドル/トン)、ロシア(250 ドル/トン)、EU(246 ドル/トン)に比べ高い。

ここ数年の米国産小麦の輸出量は、2017/18 年度より 24 百万トン～27 百万トンで推移してきたが、2021/22 年度、2022/23 年度は干ばつによる生産減を受けて約 21.0 百万トンの水準に低下。また、品種別で、これまで第 1 位だった HRW(ハード・レッド・ウインター)の輸出量が、2023/24 年度はすでに HRS、SRW(※)に次ぐ第 3 位となり、1974/75 年度以降で最低になるとみられる。この背景には、とうもろこし、大豆の作付面積の増加による HRW の作付面積の長期的な低迷や、国際市場での HRW の価格競争力の低下がある。さらに、2 年続きの干ばつによる生産減もロシア産、EU 産に対する競争力低下の要因である。

小麦－米国(冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位: 百万トン)					
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月) 予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.8	44.9	47.2	-	5.1
消 費 量	29.8	30.8	30.7	-	▲ 0.2
うち飼料用	1.8	2.5	2.5	-	▲ 0.4
輸 出 量	21.7	20.7	19.1	-	▲ 7.7
輸 入 量	2.6	3.3	3.5	-	6.6
期末在庫量	19.0	15.8	16.8	-	6.1
期末在庫率	37.0%	30.7%	33.6%	-	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.33	-	6.8
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.08	-	▲ 1.6
資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 「World Agricultural Production」(12 September 2023)					

図 米国産小麦の品種別の輸出量の推移



資料: USDA「Wheat Date Recent」(2023.9.13)をもとに農林水産省で作成

表 米国産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年8月)		2023/24年度 (2023年6月～8月)		2022/23年度 (2022年6月～8月)	
国 名	輸出量 シェア	国 名	輸出量 シェア	国 名	輸出量 シェア
メキシコ	35.1 22.1	メキシコ	126.3 29.2	メキシコ	126.3 21.1
フィリピン	18.4 11.6	フィリピン	79.5 18.4	フィリピン	79.5 13.3
日本	17.9 11.3	日本	53.4 12.3	日本	53.4 8.9
台湾	13.0 8.2	韓国	42.4 9.8	韓国	42.4 7.1
韓国	12.2 7.7	イエメン	28.2 6.5	イエメン	28.2 4.7
インドネシア	7.9 5.0	ニジェリア	24.2 5.6	ニジェリア	24.2 4.0
コロンビア	6.8 4.3	コロンビア	21.7 5.0	コロンビア	21.7 3.6
その他	47.6 30.0	その他	57.3 13.2	その他	222.6 37.2
計	158.9 100.0	計	433.0 100.0	計	598.3 100.0

資料: USDA「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成。

※HRS: ハード・レッド・スプリング、SRW: スプリング・レッド・ウインター

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の生産量(AAFC)は前年度に比べ 13.1%減の 29.8 百万トン

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.9.25)によれば、小麦全体の生産量は 29.8 百万トンと前年度より 13.1%減少、過去 5 年平均に比べ 4.8%減少する見込み。収穫面積は増加(前年度比 5.6%増)したものの、主要生産地のサスカチュワン州西部とアルバータ州南部の干ばつにより単収が低下(同 17.9%減)したことが生産量減少の要因である。

小麦全体のうち普通小麦の生産量は、収穫面積が増加(同 7.8%増)したものの、プレーリー平原南部の干ばつにより単収が低下(16.4%減)したことから、25.8 百万トンと前年度に比べ 9.7%減少、5 年平均に比べ 2 %減少の見込み。普通小麦のうち、春小麦の生産量は、前年度に比べ 12%減少の 22.6 百万トン、冬小麦は同 16%減少の 3.1 百万トンの見込み。また、デュラム小麦の生産量は、収穫面積の減少(同 1.5%減)と単収の低下(同 29.0%減)から、4.1 百万トンと前年度に比べ 29.9%減少の見込み。

各州政府の 9 月中旬までの報告によれば、①サスカチュワン州で、収穫が進展し、収穫進捗率は、春小麦、冬小麦それぞれ 75%、99%となり、前年度の 68%、97%をいずれも上回ったものの、デュラム小麦の収穫進捗率は 88%と前年度(90%)を下回った。②マニトバ州で、冬小麦の収穫が終了、春小麦の収穫進捗率は 85%であり前年度(57%)を上回っている。③アルバータ州で、春小麦の収穫進捗率は 36%と前年度(39%)を下回ったものの、デュラム小麦の収穫進捗率は 79%と前年度(73%)を上回っている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の減少による輸出余力の低下を受けて、前月予測から 2.5 百万トン下方修正され 21.3 百万トンと、前年度に比べ 16.6%減少の見込み。

品種別の輸出量は、普通小麦が、生産量の減少から前月予測から 2.4 百万トン下方修正され、18.0 百万トンと前年度に比べ 11.8%減少も、世界からの高品質小麦への需要は継続する見込み。また、デュラム小麦も、生産減により、前月予測から 1.8 百万トン下方修正され、3.3 百万トンと同 35.7%減少するものの、生産量が減少した北アフリカと米国、品質が低下したイタリアからの需要が継続する見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、7 月の輸出量は、普通小麦が 1.6 百万トン、デュラム小麦が 0.2 百万トン。輸出先国は、普通小麦がインドネシア(20.2%)、中国(15.7%)、ペルー(8.4%)の順、デュラム小麦がモロッコ(32.0%)、イタリア(13.3%)、米国(11.6%)の順。

なお、2022/23 年度の輸出量は、普通小麦が 19.7 百万トン (前年度比 70.7%増)、デュラム小麦が 5.1 百万トン (同 93.1%増) と、干ばつの影響を受けた 2021/22 年度から回復した。

小麦－カナダ (春小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)					
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	22.4	34.3	31.0 (29.8)	▲ 2.0	▲ 9.7
消 費 量	10.2	9.2	8.7 (8.6)	▲ 0.4	▲ 5.6
うち飼料用	5.2	4.1	3.5 (4.2)	▲ 0.5	▲ 14.2
輸 出 量	15.1	25.8	23.0 (21.3)	▲ 1.5	▲ 10.7
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	3.7	3.6	3.5 (3.6)	0.9	▲ 2.8
期末在庫率	14.5%	10.2%	11.0% (12.0%)	3.4	0.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.60 (10.65)	-	5.2
単収(t/ha)	2.44	3.41	2.92 (2.80)	▲ 0.19	▲ 14.4
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 September 2023) AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(25 September 2023)					

図 カナダ産小麦の輸出量、輸出先国

(普通小麦)						(輸出量：万トン、シェア：%)					
2022/23年度 (2023年7月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年7月)					
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア			
インドネシア	32.9	20.2	中国	296.8	15.1	日本	159.2	13.8			
中国	25.5	15.7	インドネシア	213.8	10.9	インドネシア	128.1	11.1			
ペルー	13.7	8.4	日本	167.3	8.5	中国	102.4	8.9			
日本	12.9	7.9	ペルー	148.3	7.5	コロンビア	79.2	6.9			
バングラデシュ	11.4	7.0	バングラデシュ	144.4	7.3	ペルー	69.4	6.0			
ナイジェリア	9.6	5.9	コロンビア	109.9	5.6	米国	65.8	5.7			
その他	56.8	34.9	その他	886.1	45.1	その他	548.0	47.6			
計	162.8	100.0	計	1,966.6	100.0	計	1,152.1	100.0			
(デュラム小麦)											
2022/23年度 (2023年7月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年7月)					
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア			
モロッコ	7.2	32.0	イタリア	121.0	23.9	モロッコ	72.2	27.5			
イタリア	3.0	13.3	アルジェリア	120.8	23.8	アルジェリア	44.5	16.9			
米国	2.6	11.6	モロッコ	85.7	16.9	アメリカ	40.9	15.6			
アルジェリア	2.3	10.2	米国	50.4	9.9	イタリア	33.5	12.8			
ペルー	1.8	8.0	チュニジア	32.5	6.4	日本	20.2	7.7			
ポルトガル	1.4	6.2	日本	18.1	3.6	ナイジェリア	12.3	4.7			
その他	4.2	18.7	その他	78.8	15.5	その他	39.0	14.9			
計	22.5	100.0	計	507.3	100.0	計	262.6	100.0			

資料：Canadian Grain Commission

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の生産量は前年度比 34.5%減の 26.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、収穫面積が引き上げられたものの、エルニーニョ現象による乾燥天候の影響を受けて単収が引き下げられたことから、前月予測から 3.0 百万トン下方修正され 26.0 百万トンの見込み。史上最高であった前年度に比べ 34.5%減少するものの、10 年平均(26.4 百万トン)に比べ生産量は 1.5%の減少に留まっている。

また、豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2023.9.6)によれば、2023/24 年度の実産量は、収穫面積の減少と乾燥天候を受けての単収低下から、25.4 百万トンと史上最高の前年度から 36.0%減少するものの、過去 10 年平均(26.4 百万トン)に比べ 3.8%減の水準に留まる見込み。

主要生産州では、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)で、播種面積が前年度から 2%減少し、単収も乾燥天候により減少するため、8.5 百万トンと史上最高であった前年度の 14.0 百万トンから 39.3%減少するものの、過去 10 年平均(9.6 百万トン)に比べ 11.6%減の水準に留まる見込み。また、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)で、播種面積の減少と乾燥天候による単収低下から、6.6 百万トンと前年度に比べ 35.7%減少するものの、過去 10 年平均(7.4 百万トン)に比べ 10.3%の減少に留まる見込み。

2023/24 年度は、NSW 州と WA 州等の南部で、冬の初めに降雨を受けて生長が促進されたものの、NSW 州と WA 州の北部では土壌水分不足となり、単収予測が低下している。

豪州気象局によれば、9 月から 11 月にかけての降水量は平年を下回る可能性がある。このため、現在、土壌水分量が少ない地域では十分な降雨が必要とされており、単収への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の下方修正を受け、前月予測から 2.5 百万トン下方修正され、19.0 百万トンと前年度に比べ 41.5%減少の見込み。

現地情報によれば、この輸出量減少により、豪州の市場であるインドネシア、タイ等では、豪州産から、品質次第では相対的に安価なアルゼンチン産やロシア産にシフトする可能性がある。

2023 年 7 月の輸出量は 270.6 百万トンと前年度(259.9 百万トン)を上回り、輸出先国はインドネシア(23.5%)、中国(23.2%)、フィリピン(17.0%)の順。中国向け輸出量は 6 月に 13.7 万トンに減少したものの、7 月には 62.9 万トンに増加した。また、2022/23 年度(2022 年 10 月から 2023 年 7 月まで)の輸出量は 2,815.8 万トンで、前年度同時期を 21.2%上回るペースで輸出が進んだ。輸出先国は、中国(24.8%)、インドネシア(14.7%)、フィリピン(9.5%)、の順で、輸出量の 7 割以上がアジア諸国向けである。

小麦一豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	36.2	39.7	26.0 (27.9)	▲ 3.0	▲ 34.5	
消 費 量	8.5	8.0	7.2 (8.2)	▲ 0.5	▲ 10.0	
うち飼料用	5.0	4.5	3.7 (4.5)	▲ 0.5	▲ 17.8	
輸 出 量	27.5	32.5	19.0 (21.0)	▲ 2.5	▲ 41.5	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	3.5	2.8	2.8 (1.8)	-	-	
期末在庫率	9.6%	7.0%	10.8% (6.1%)	1.1	3.8	

(参考)

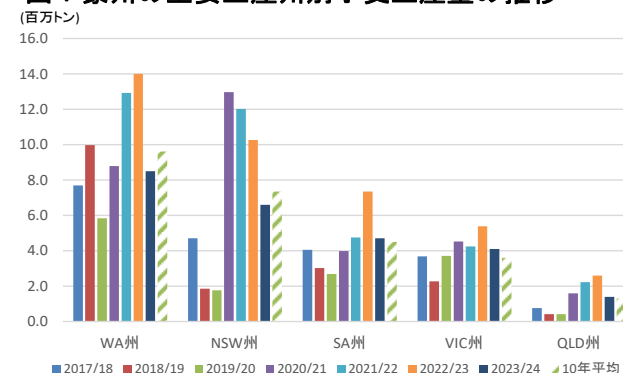
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.60 (12.8)	0.10	▲ 3.4
単収(t/ha)	2.85	3.04	2.06 (2.18)	▲ 0.26	▲ 32.2

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 September 2023)

IGC 「Grain Market Report」(17 August 2023)

図: 豪州の主要生産州別小麦生産量の推移



資料: ABARES 「Crop Report」(2023.9.5)を基に農林水産省で作成

写真: 豪州 NSW 州中南部の小麦圃場



写真: Profarmer Australia

小麦(オーストラリアン・プライム・ハード)は、急速に生長している。また、この圃場では、8月末の降雨と日照により、十分な収穫量が見込まれているものの、さび病が懸念されている。

＜ EU27 ＞ ポーランド、ハンガリー、スロバキアはウクライナ産小麦の輸入規制を継続

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.8.24)によれば、2023/24 年度の EU27 の生産量は、前月予測から 0.4 百万トン下方修正され 134.3 百万トンとなるものの、前年度(133.9 百万トン)、過去 5 年平均(132.5 百万トン)を上回る見込み。

小麦全体のうち、普通小麦は 127.1 百万トンと前年度に比べ 0.3%増、5 年平均に比べ 1.9%増。また、デュラム小麦は 7.2 百万トンと、前年度に比べ 1.5%増となるものの、5 年平均に比べ 6.8%減の見込み。

国別の予測では、普通小麦は、フランス等で上方修正されたものの、ドイツ、スウェーデン等で下方修正された。また、デュラム小麦は、スロバキアで上方修正されたものの、フランス等で下方修正された。

主要生産国の生育段階は、フランスで 8 月に収穫が終了した。なお、8 月にフランス北西部、ドイツの大部分で降雨が頻繁にあったため、発芽等の品質の悪化が懸念されている。

フランス農業・食料・主権省によれば、現時点でのたんぱく質含有量は、普通小麦で 11.6%、デュラム小麦で 14.2%と、それぞれ前年度(普通小麦：11.1%、デュラム小麦：11.7%)を上回った。

ドイツ連邦食料・農業省によれば、現時点のタンパク質含有量は 11.7%と前年度(11.8%)を若干下回った。今後、降雨の影響で収穫が遅れた小麦の分析が進むにつれ、品質が更に低下すると懸念されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、ドイツ等での降雨による品質の低下を受けて飼料用途の消費が上方修正され、108.5 百万トンと前年度に比べ 0.5%増加する見込み。

2023/24 年度の輸出量は、生産量の下方修正から、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され 37.5 百万トンとなるものの、前年度に比べ 6.9%増加の見込み。なお、輸出価格(FOB)は、フランス産の低調な輸出ペースやロシア産との厳しい価格競争から 9 月 8 日時点で 246 ドル/トンと、前月から 16 ドル下落し、主要輸出 6 か国(EU のほか、カナダ、米国、アルゼンチン、豪州、ロシア)中で 1 番低い。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、2023 年 4 月 28 日に欧州委員会は、5 月 2 日から 6 月 5 日までの間、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子のトランジットを除く輸入禁止を決定。その後、ポーランド等 5 か国は 9 月 15 日までに段階的に規制を廃止することを決定した。EU 委員会は、期限となる 9 月 15 日に、輸入規制の解除を決定したものの、東欧 5 か国のうちポーランド、ハンガリー、スロバキアは同日、ウクライナ産穀物のトランジットを認めながらも、独自の規制の継続を表明した。

小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	138.2	134.2	134.0	(133.3)	▲ 1.0	▲ 0.1
消 費 量	108.3	108.0	108.5	(108.3)	1.0	0.5
うち飼料用	45.0	44.0	44.0	(44.0)	1.0	-
輸 出 量	31.9	35.1	37.5	(36.2)	▲ 1.0	6.9
輸 入 量	4.6	12.0	7.5	(5.9)	0.5	▲ 37.7
期末在庫量	13.3	16.5	12.0	(13.8)	▲ 1.2	▲ 27.4
期末在庫率	9.5%	11.5%	8.2%	(9.6%)	▲ 0.8	▲ 3.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.29	24.38	24.25	(24.01)	▲ 0.05	▲ 0.5
単収(t/ha)	5.69	5.50	5.53	(5.55)	▲ 0.03	0.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC 「Grain Market Report」(17 August 2023)

表 EU 産小麦の輸出量、輸出先国(普通小麦、デュラム小麦)

＜普通小麦＞								(輸出量:万トン、シェア:%)	
2023年6月			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)			
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	
サウジアラビア	32.0	13.6	モロッコ	468.5	14.3	アルジェリア	520.0	17.8	
ナイジェリア	28.9	12.3	アルジェリア	425.5	13.0	エジプト	280.4	9.6	
インドネシア	15.2	6.5	ナイジェリア	294.9	9.0	ナイジェリア	228.2	7.8	
エジプト	12.6	5.4	サウジアラビア	192.5	5.9	中国	221.5	7.6	
アルジェリア	11.5	4.9	エジプト	180.6	5.5	モロッコ	211.6	7.2	
その他	134.9	57.4	その他	1,704.1	52.2	その他	1,463.9	50.0	
計	235.1	100.0	計	3,266.1	100.0	計	2,925.7	100.0	

＜デュラム小麦＞								(輸出量:万トン、シェア:%)	
2023年6月			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)			
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	
チュニジア	1.8	31.7	チュニジア	13.2	15.4	チュニジア	45.5	39.5	
エジプト	1.1	18.8	アラブ首長国連邦	9.1	10.6	アルジェリア	15.6	13.6	
リビア	0.6	9.6	タンザニア	8.9	10.4	英国	8.9	7.8	
コートジボワール	0.5	8.8	イスラエル	6.6	7.7	コートジボワール	8.0	6.9	
スイス	0.4	7.8	英国	6.3	7.4	トルコ	6.5	5.6	
その他	1.3	23.3	その他	41.7	48.5	その他	30.7	26.7	
計	5.7	100.0	計	86.0	100.0	計	115.2	100.0	

資料：欧州委員会「Cereals export and import」(2023.8.22)を基に農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量は、137.0 百万トンと史上 2 番目

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、137.0 百万トンの見込み。前年度に比べ、収穫面積は増加したものの単収の低下から、生産量は 0.5% 減少した。

なお、中国の実生産量は、2018/19 年度から毎年増加し、2022/23 年度に史上最高の 137.7 百万トンとなったものの、2023/24 年度は、豪雨の影響を受けたため、史上 2 番目の生産量となる見込みである。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 7 月号」(2023.8.11)によれば、播種面積は前年度に比べ 0.4% 増の 23.10 百万ヘクタール、単収は同 1.3% 減の 5.83 トン/ヘクタールの見込みで、生産量は前年度に比べ 0.9% 減の 134.6 百万トンとなるものの、依然として高水準であり豊作となっている。

生育状況は、中国全土で小麦(冬小麦、春小麦)の収穫は終了した。なお、5 月下旬に河南省、陝西省中南部等を中心に降雨の影響を受け、小麦の一部で穂発芽やカビが発生し小麦の品質が低下した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、収穫期の降雨による品質低下から、飼料用グレードの供給が増加したことを受け、前月予測に比べ飼料用途等が上方修正され、153.0 百万トンと前年度に比べ 3.4% 増加する見込み。

2023/24 年度の輸入量は、中国国内の飼料用小麦の増加や、豪州やカナダの実生産減による輸出量の減少から、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され 11.0 百万トンと、前年度に比べ 17.2% 減少の見込み。

中国税関統計によれば、2023 年 1 月から同年 7 月までの輸入量は 872.1 万トンと、前年同時期を 53.5% 上回った。この間の輸入先国のシェアは、豪州が 63.7%、カナダが 16.6%、フランスが 9.4% であり、この 3 か国で 89.7% を占めている。なお、現地情報によれば、中国の輸入先国の多角化の一環で、輸入業者である中国の中糧集団 (COFCO) と隣国のカザフスタンは、中国の年間穀物輸入量を最大 100 万トンまで増やす計画を立てた。カザフスタンからの 2023 年 1 月から 7 月の小麦輸入量は 23.6 トンとすでに前年度の年間輸入量(3.1 万トン)を上回り、過去 5 年の年間平均(27.0 万トン)に迫っている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 7 月号」(2023.8.11)によれば、中国国内の小麦供給は、新穀小麦の生産者売渡し価格が低いことを受け農家からの供給が低調であるとともに、降雨により一部産地の高品質小麦の減産により減少している。一方、需要面では、小麦の消費需要は弱い。このため、中国国内の小麦価格は、普通小麦は横ばいの一方、高品質小麦は若干上昇した。なお、中国の国内在庫量は豊富なため、2023/24 年度の実生産量の減少が市場に与える影響は軽微とみられている。

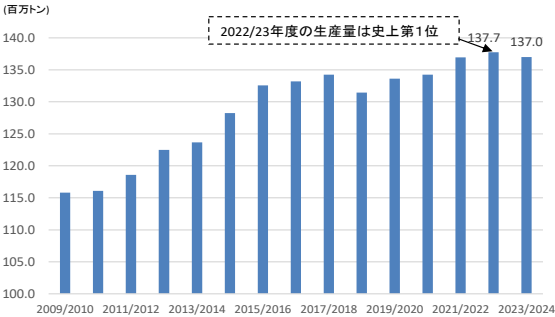
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	137.0	137.7	137.0 (136.5)	-	▲ 0.5	
消 費 量	148.0	148.0	153.0 (149.5)	1.0	3.4	
うち飼料用	35.0	33.0	37.0 (32.0)	1.0	12.1	
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.2)	-	▲ 5.3	
輸 入 量	9.6	13.3	11.0 (12.2)	▲ 1.0	▲ 17.2	
期末在庫量	136.8	138.8	132.9 (138.4)	▲ 2.0	▲ 4.3	
期末在庫率	91.9%	93.2%	86.4% (91.9%)	▲ 1.9	▲ 6.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.70 (23.7)	-	0.8	
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.76)	-	▲ 1.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC 「Grain Market Report」(17 August 2023)

図 中国の小麦生産量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023. 9. 12)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量と輸入先国

(輸出入量：万トン、シェア：%)

2023年7月			2023年1月～2023年7月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	49.7	70.0	豪州	555.7	63.7
カナダ	11.2	15.8	カナダ	144.4	16.6
米国	0.1	0.1	フランス	82.1	9.4
カザフスタン	7.7	10.9	米国	54.9	6.3
ロシア	1.9	2.7	カザフスタン	23.6	2.7
ベトナム	0.1	0.1	ロシア	7.7	0.9
その他	0.3	0.4	その他	3.7	0.4
計	71.0	100.0	計	872.1	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2023/24 年度の輸出量は前月より上方修正され史上最高の 49.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、85.0 百万トンの見込み。播種期の降雨過多による収穫面積の減少と単収の低下から、生産量は史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ 7.6%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 6.8%上回る見込み。種類別の生産量は、冬小麦、春小麦いずれも前月予測からの変更はなく、それぞれ 60.5 百万トン(前年度比 11.0%減)、24.5 百万トン(同 2.1%増)の見込み。

ロシア気象センターによれば、生育状況は、①ヨーロッパ部では、北部の北西連邦管区等で収穫が進展し、品質は良好である。また、南部の南連邦管区等では、収穫が概ね終了。②アジア部では、ウラル連邦管区等で冬小麦、春小麦の収穫作業が順調に進んだ。なお、ロシア穀物同盟によれば、2023/24 年度のロシア全体の穀物の品質は平年並みで、大きな問題はない。

なお、ヨーロッパ部北部では、2024/25 年度の冬穀物の播種は 8 月末から開始され、ヨーロッパ部南部では 2024/25 年度の冬穀物の播種前に乾燥傾向であった土壌水分は降雨により改善された。

ロシア農業省によれば、9 月 5 日時点までの小麦全体の収穫進捗率は 69.6%で、収穫済面積は降雨の影響を受け前年度同期を 2.5%下回る 20.72 百万ヘクタール。また、収穫済数量(品質調整前重量)は、単収が同 3.6%低下したこと、前年度同期比 12.5%減の 77.9 百万トンである。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、中東、北アフリカからの旺盛な需要や、輸出余力が十分なこと、豪州等の主要輸出国の輸出量が減少すること等から、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 49.0 百万トンと、史上最高であった前年度を更に 6.5%上回る見込み。なお、輸出余力は、生産量と期首在庫をあわせた国内供給量が 100 百万トンを超え、十分となっている。

8 月のロシアの輸出量は、530.4 万トンと過去 3 年の 8 月平均(465.0 万トン)を 14.1%上回った。輸出先国は、エジプト(34.6%)、アルジェリア(24.2%)、トルコ(18.2%)の順である。また、前年度同期と比べると、アルジェリア、ケニアへの輸出量がそれぞれ 908%増、648.6%増となるとともに、ブラジルへの輸出量も増加しており、アフリカ諸国や南米諸国向けの輸出量の増大が顕著である。なお、7 月にロシア農相はロシア産穀物の輸出先は 96%が対ロ制裁をしていない友好国向けとしていた。

2023/24 年度の 7 月、8 月の輸出量合計(932.2 百万トン)は、輸出税の算定方法の変更等もあり、過去 3 年の同時期の平均(710.7 百万トン)を 31.2%上回っており、輸出量は増加している。

小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			(単位:百万トン)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	75.2	92.0	85.0 (84.4)	-	▲ 7.6
消 費 量	41.8	42.3	42.0 (44.0)	-	▲ 0.6
うち飼料用	18.5	19.0	19.0 (19.5)	-	-
輸 出 量	33.0	46.0	49.0 (46.6)	1.0	6.5
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.1)	-	-
期末在庫量	12.1	16.1	10.4 (10.4)	▲ 1.0	▲ 35.3
期末在庫率	16.2%	18.3%	11.5% (11.4%)	▲ 1.2	▲ 6.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	28.30 (27.9)	-	▲ 2.4
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.00 (3.03)	-	▲ 5.4

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC 「Grain Market Report」(17 August 2023)

図 ロシアの小麦供給量と輸出量の推移

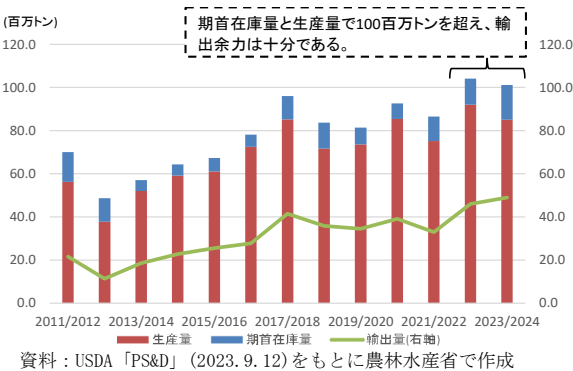


表 ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年8月)			2023/24年度 (2023年7月～2023年8月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	82.4	34.6	エジプト	132.4	14.2	エジプト	836.8	17.4
アルジェリア	57.6	24.2	トルコ	96.3	10.3	トルコ	682.1	14.2
トルコ	43.3	18.2	アルジェリア	79.0	8.5	バングラデシュ	199.2	4.1
ケニア	36.9	15.5	サウジアラビア	68.1	7.3	パキスタン	155.2	3.2
バングラデシュ	32.1	13.5	バングラデシュ	59.5	6.4	イラン	149.6	3.1
ブラジル	25.3	10.6	イスラエル	55.1	5.9	アゼルバイジャン	136.9	2.8
イスラエル	23.8	10.0	ケニア	46.7	5.0	カザフスタン	125.5	2.6
その他	229.0	96.1	その他	395.1	42.4	その他	2,521.5	52.5
計	530.4	222.7	計	932.2	100.0	計	4,806.8	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の生産量は前月に比べ上方修正され 22.5 百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の実産量(クリミア地域分を含む)は、良好な天候による単収と収穫面積の引上げから、前月予測から1.5百万トン上方修正され、22.5百万トンとなり、前年度(21.5百万トン)を4.7%上回るものの、5年平均(26.8百万トン)は16.1%下回る見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、9月15日現在、4.69百万ヘクタール(前年同期4.68百万ヘクタール)で冬小麦の収穫が行われた。また、単収は4.72トン/ヘクタール(同4.11トン/ヘクタール)で、収穫済数量は、22.2百万トン(同19.2百万トン)である。ウクライナ穀物協会によれば、2023/24年度の実収量が前年度を上回ったのは、気象条件に恵まれ、単収が上昇したためとしている。

一方、2024/25年度の冬小麦の播種が例年通り9月初めから開始されており、9月11日現在の播種面積は0.23百万ヘクタールで前年度(0.14百万ヘクタール)を上回っている。なお、8月下旬にほとんど降雨がなく、土壌水分不足による生育への影響が懸念されている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の実輸出量は、生産量が上方修正されたことから、前月予測から0.5百万トン上方修正され11.0百万トンとなるものの、前年度及び5年平均をそれぞれ35.7%、38.8%下回る見込み。前年度からの輸出量減少の要因は、生産量は増加したものの、期首在庫量が1.3百万トンと平年並み(2021/22年度までの5年平均1.5百万トン)に戻り、輸出余力が減少するためである。

ウクライナ政府等によれば、2023年8月の輸出量は120.3万トンと前年度同期に比べ36.2%増加したものの、戦争前の2018/19年度～2020/21年度の8月平均に比べると60.4%の減少である。また、8月の輸出先国は、ルーマニア(31.4%)、スペイン(23.9%)、エジプト(17.0%)の順で、現在のところ、黒海穀物イニシアチブ履行時の輸出先国と大きな変化はない。また、2022年8月から2023年6月の間の黒海穀物イニシアチブが履行されていた期間の月平均輸出量(150.6万トン)と比べると、鉄道等の代替手段の利用を受けて20.1%減に留まっている。なお、現地報道によれば、黒海イニシアチブの履行停止により、鉄道、他国の港を活用するウクライナ産穀物の代替輸出ルートが検討されているものの、現在のところ大きな進展は見られない。最も有力なのは、ドナウ川ルート(ウクライナのレニ港等からドナウ川、スリナ運河を経由しルーマニアのコンスタンツァ港から輸出するルート等)で、ルーマニア政府は月間輸送量400万トンを目指しているものの、ロシアによる攻撃で穀物及び穀物施設が被害を受けるとともに、輸送料金が上昇している。また、ポーランドの鉄道及びバルト海諸港経由は物流コストの高さが課題である。

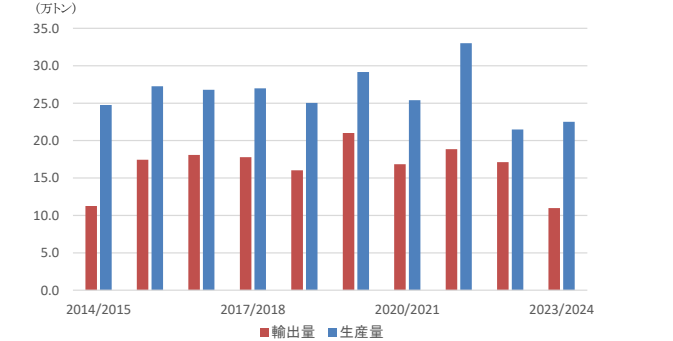
小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	33.0	21.5	22.5 (24.5)	1.5	4.7	
消 費 量	10.5	8.4	8.8 (12.3)	0.7	4.8	
うち飼料用	4.5	3.4	4.2 (2.7)	0.7	23.5	
輸 出 量	18.8	17.1	11.0 (12.0)	0.5	▲ 35.7	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
期末在庫量	5.3	1.3	4.1 (2.8)	▲ 0.0	209.0	
期末在庫率	18.0%	5.2%	20.8% (11.4%)	▲ 1.4	15.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	5.00 (5.9)	0.20	▲ 10.7	
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.50 (4.19)	0.12	17.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC 「Grain Market Report」(17 August 2023)

図 ウクライナの月別による小麦の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.9.12)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナ産小麦の輸出量、輸出先国

2023/24年度 (2023年8月)			2023/24年度 (2023年7月～2023年8月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
ルーマニア	37.8	31.4	ルーマニア	59.9	29.6	トルコ	367.1	21.7
スペイン	28.7	23.9	スペイン	45.7	22.5	ルーマニア	264.6	15.7
エジプト	20.4	17.0	エジプト	26.9	13.3	スペイン	255.7	15.1
イタリア	7.4	6.2	イタリア	12.8	6.3	バングラデシュ	108.7	6.4
ギリシャ	6.3	5.2	ギリシャ	11.0	5.4	ポーランド	87.6	5.2
イスラエル	2.2	1.8	トルコ	10.7	5.3	エジプト	85.6	5.1
インドネシア	2.1	1.7	インドネシア	4.7	2.3	イタリア	59.4	3.5
その他	15.4	12.8	その他	31.0	15.3	その他	743.4	44.0
計	120.3	100.0	計	202.7	100.0	計	1,690.0	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正されたものの、米国、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

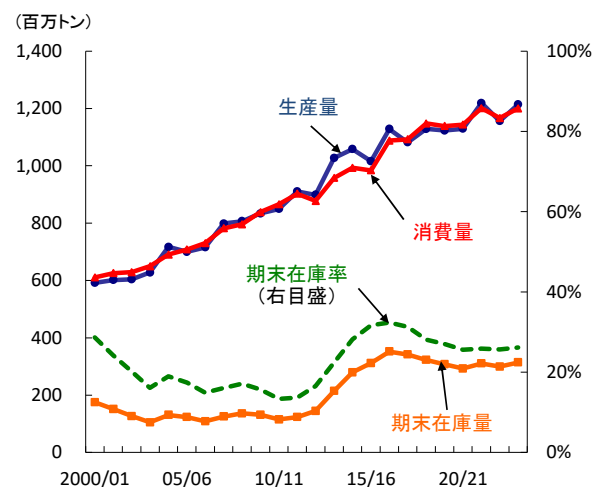
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチンで上方修正されたものの、カナダ、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 —

・前月予測からの変更はなく、前年度を上回る見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2023.9.12）をもとに農林水産省にて作成

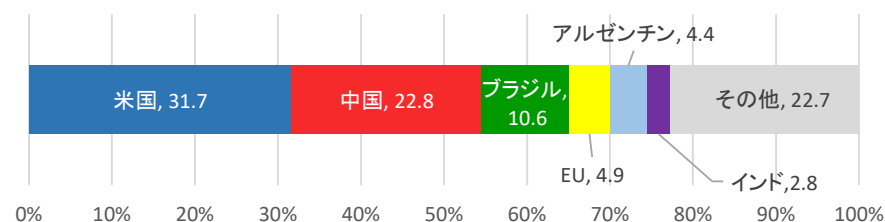
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

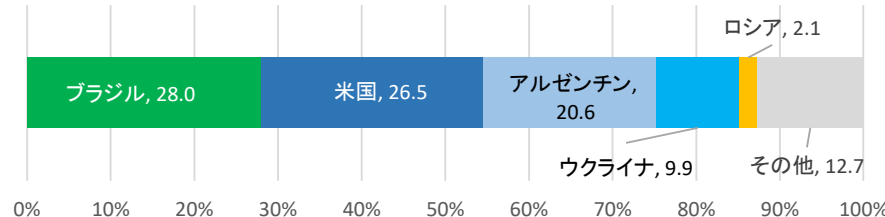
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,218.7	1,155.6	1,214.3	0.8	5.1
消費量	1,201.1	1,166.7	1,199.8	▲ 0.6	2.8
うち飼料用	745.2	730.6	756.1	▲ 0.6	3.5
輸出量	206.6	181.7	196.2	—	8.0
輸入量	184.4	175.6	187.1	0.0	6.6
期末在庫量	310.5	299.5	314.0	2.9	4.8
期末在庫率	25.9%	25.7%	26.2%	0.3	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 September 2023）

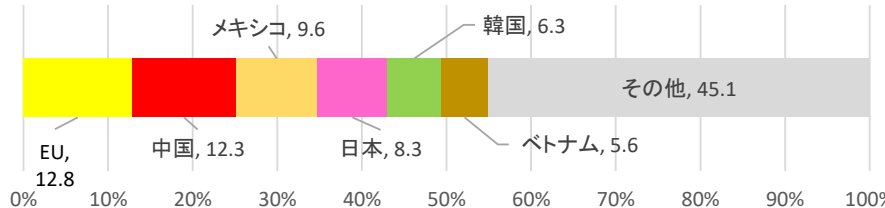
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,214.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(196.2 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(187.1 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量が上方修正され、史上２番目の豊作見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、収穫面積の増加等により前年度より10.2%増の384.4百万トンと、2016/17年度に次ぐ史上２番目の高水準となる見通し。なお、作柄実績調査を受けてアイオワ州等の主産州における作柄の悪化により単収見通しが引下げられたものの、主産州以外で収穫面積が引き上げられたため、前月予測から全体として0.6百万トン上方修正された。

USDA「Crop Progress」（2023.9.18）によれば、9月17日現在で主要18州におけるデント（穀粒に窪みができる段階）進捗率は90%と、前年同時期（86%）、過去5年平均（87%）を上回っている。成熟進捗率も54%と、前年度同期（38%）、過去5年平均（44%）より進んでいる。作柄評価が「良～やや良」の比率は51%と、前週（52%）からやや引き下げられ、前年同時期（52%）もやや下回っている。テキサス州等南部地域では収穫が開始されている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ2.6%増の313.5百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格低下に伴う需要増加を受けた輸出の回復期待から、前年度より23.1%増の52.1百万トンの見込み。2023/24年度に輸入が増加すると見込まれる中国への輸出をめぐり、ブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.9.12）によれば、本年9月の米国産の輸出価格は、ミシシッピ川における水位低下を受け、はしけ運賃が上昇したことにより、前月から上昇した。また、2022/23年度（2022年9月～2023年8月）の輸出量は37.2百万トンと、前年同時期の55.0百万トンより32%減少。輸出先国の内訳はメキシコ（13.4百万トン）、中国（7.5百万トン）、日本（6.8百万トン）の順となっている。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、2023/24年の生産量が上方修正されたため、前月予測から0.5百万トン上方修正され、前年度より53.0%増の56.4百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より4.8ポイント上昇し15.4%と、過去3年平均（9.4%）を上回っている。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

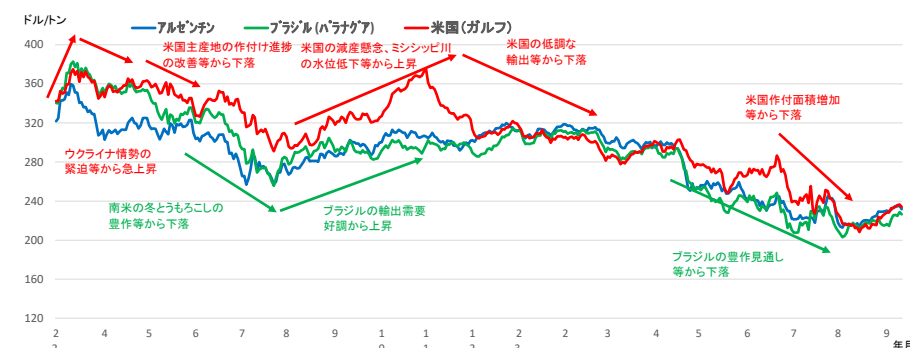
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年9月～24年8月）		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	382.9	348.8	384.4	0.6	10.2
消 費 量	317.1	305.6	313.5	-	2.6
うち飼料用	145.4	137.8	142.9	-	3.7
エタノール用等	135.1	132.0	134.6	-	2.0
輸 出 量	62.8	42.3	52.1	-	23.1
輸 入 量	0.6	1.0	0.6	-	▲ 37.3
期末在庫量	35.0	36.9	56.4	0.5	53.0
期末在庫率	9.2%	10.6%	15.4%	0.1	4.8

（参考）

収穫面積(百万ha)	34.53	32.05	35.25	0.32	10.0
単収(t/ha)	11.09	10.88	10.91	▲ 0.08	0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 September 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2023/24 年度の夏とうもろこしの作付は順調

【生育・生産状況】USDAによれば、本年9月以降に作付けが開始される2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より5.8%減の129.0百万トンの見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2023.9.6）によれば、収穫がほぼ終了した2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比9.4%増の27.4百万トンの見込み。大豆収穫後の2月以降に作付けされ、収穫期を迎えている冬とうもろこしの生産量は、降雨に恵まれ前年度比18.6%増の104.5百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比16.6%増の131.9百万トンで史上最高の見込み（P.23 大豆—ブラジルのクロップカレンダー参照）。

2022/23年度の冬とうもろこしについて、USDAによれば、9月11日現在、南部のパラナ州の収穫進捗率は89%と前年度同期（97%）より遅れている。

2023/24年度の夏とうもろこしについて、USDAによれば、主要生産州の中西部のマット・グロッソ州で収穫はほぼ終了。9月11日現在、南部のパラナ州の作付進捗率は42%と前年度同期（32%）より進んでいる。9月14日現在、南部のリオ・グランデ・ド・スール州の作付進捗率は44%と、前年度同期（35%）より進んでいる。9月中旬の降雨により土壌水分が保持され、作物の発芽に適した状況となっているため、作付けが順調に進められているとみられる。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用、加工用ともに需要増加等から、前年度より3.3%増の77.5百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度より3.5%減の55.0百万トンとなるものの、引き続き高水準の生産量と競争力のある安価な輸出価格から、2年連続で世界最大の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～8月の輸出量は25.2百万トンで、前年度比41%増。内訳は、中国（4.6百万トン）、日本（3.4百万トン）、ベトナム（2.0百万トン）の順。前年11月末以降に開始された中国向けとうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャパシティに余裕が出てきた7月以降、本格化し始めている。8月の中国向け輸出量は2.3百万トンで、7月（0.9百万トン）の2.6倍となっている。

とうもろこし—ブラジル

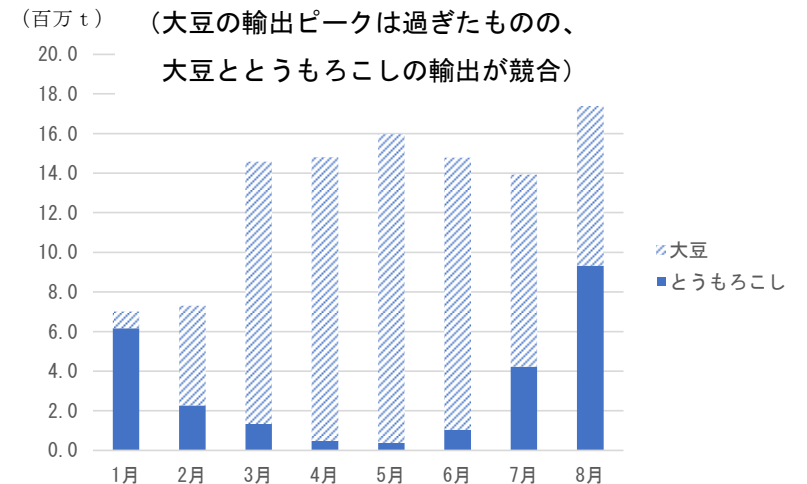
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割）

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	116.0	137.0	129.0 (130.2)	-	▲ 5.8
消 費 量	70.5	75.0	77.5 (79.2)	-	3.3
うち飼料用	59.5	62.5	63.5 (54.3)	-	1.6
輸 出 量	48.3	57.0	55.0 (51.0)	-	▲ 3.5
輸 入 量	2.6	1.3	1.2 (0.5)	-	▲ 7.7
期末在庫量	4.0	10.3	8.0 (10.8)	1.3	▲ 22.4
期末在庫率	3.3%	7.8%	6.0% (8.3%)	1.0	▲ 1.8
（参考）					
収穫面積(百万ha)	21.80	22.40	22.90 (22.63)	-	2.2
単収(t/ha)	5.32	6.12	5.63 (5.75)	-	▲ 8.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August 2023)

図：ブラジルのとうもろこし・大豆輸出量の推移（2023年）



資料：ブラジル農務省「AgroStat Brasil」をもとに農林水産省にて作成。

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により生産量が激減した前年度から大きく回復する見通しから、58.8%増の 54.0 百万トンで史上最高となる見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所の週報(2023.9.14)によれば、2023/24 年度の作付進捗率は 2.2%と、過去 5 年平均(3.7%)を下回っている。降雨が遅れたため、播種の開始が遅れたとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 16.2%増の 13.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てくる見通しから、前年度より 76.1%増の 40.5 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～7 月の輸出量は 13.5 百万トンで、2022/23 年度産が減産となった影響を受け、前年度同期比(23.6 百万トン)で 43%減となった。輸出先の内訳は、ベトナム(193.9 万トン)、ペルー(154.3 万トン)、アルジェリア(141.6 万トン)の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチンの農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2023 年 9 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンにそれぞれ設定されている。

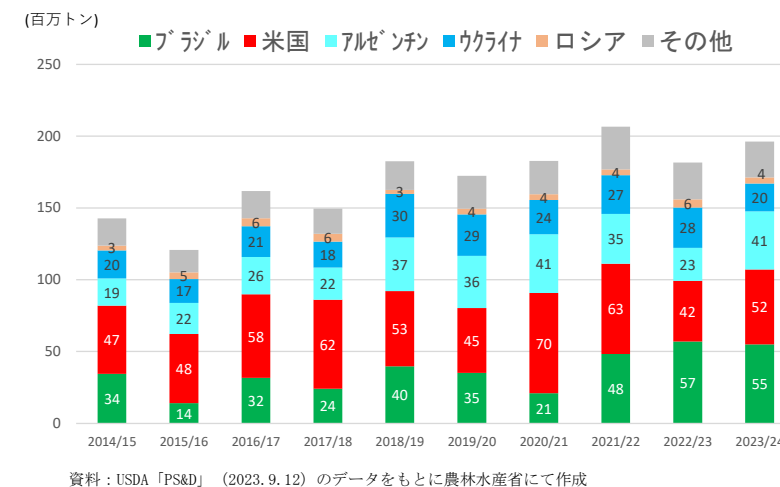
なお、アルゼンチン政府は 7 月 25 日、輸出促進プログラムを発表し、優遇為替レート(1ドル=340 ペソ)にとうもろこしを追加した。さらに、現地情報によると、大統領選挙の予備選後(8 月 14 日)、公式為替レートが 1 ドル=350 ペソに切り下げられ、そのレートが適用されるようになった。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)					
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	34.0	54.0 (61.0)	-	58.8
消 費 量	14.2	11.7	13.6 (20.4)	0.1	16.2
うち飼料用	10.1	7.5	9.3 (15.5)	-	24.0
輸 出 量	34.7	23.0	40.5 (40.9)	-	76.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	1.8	1.1	1.0 (3.6)	▲ 0.5	▲ 9.0
期末在庫率	3.7%	3.2%	1.9% (5.9%)	▲ 0.9	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	7.00 (8.20)	-	4.5
単収(t/ha)	6.97	5.07	7.71 (7.44)	-	52.1
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 September 2023) IGC 「Grain Market Report」(17 August 2023)					

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移
(2023/24 年度、アルゼンチンは世界第 3 位に戻る見通し)



＜ 中国 ＞ 主産地の降雨過多の影響を受けるも、生産量は史上２番目

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、作付けが大豆ヘシフトすることに加え主産地の降雨過多から、前年度より 0.1%減の 277.0 百万トンとなるも、前年度に次ぐ史上２番目の見込み。

9月上旬現在、春とうもろこしは主産地の黒竜江省等で乳熟期から成熟期、夏とうもろこしは主産地の河南省等で乳熟期を迎えている。

USDAによれば、8月に黒竜江省で降雨過多があり、特にとうもろこしについては、土壌の水分過多が生育期に悪影響を与える見通し。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし国際価格の低下と国内の経済成長を背景とした飼料用需要の増加から、前年度より 1.7%増の 304.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国内価格が国際価格を上回っており、また、特に前年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より 24.3%増の 23.0 百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023 年 1～7 月の輸入量は、前年同期より 9.5%減の 1,371.2 万トン。内訳は、米国（556.6 万トン）、ウクライナ（488.6 万トン）、ブラジル（227.3 万トン）の順。2023 年 4 月以降、米国産の輸入量が前年同月より大きく減少しており、背景として、米国産が他国産に比べて割高であることから輸入を控え、安価なブラジル産とうもろこしや他の穀物を飼料向けに代替する動きがあるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 7 月号」によると、7 月の国内価格は、取引業者の保有在庫が少なく売り惜しみがあり、穀物在庫が少ない一部の実需企業が買付価格を高く提示したため、2,820 元/トンと前月（2,720 元/トン）から上昇した。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、2022/23年度の輸入量が増加する見通しから前月予測から 0.5 百万トン上方修正されたものの、前年度より 2.0%減の 201.8 百万トンの見込み。2023/24年度の期末在庫率は、前年度から 2.5 ポイント減の 66.4%となる見込み。

とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	272.6	277.2	277.0 (277.4)	-	▲ 0.1
消 費 量	291.0	299.0	304.0 (305.5)	-	1.7
うち飼料用	209.0	218.0	223.0 (205.0)	-	2.3
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-
輸 入 量	21.9	18.5	23.0 (22.0)	-	24.3
期末在庫量	209.1	205.8	201.8 (169.9)	0.5	▲ 2.0
期末在庫率	71.9%	68.8%	66.4% (55.6%)	0.2	▲ 2.5

（参考）

収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	43.00 (43.00)	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.44 (6.45)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)

IGC「Grain Market Report」(17 August 2023)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2023年7月			2023年1月～2023年7月			2022年1月～2022年7月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
米国	87.2	51.9	米国	556.6	40.6	米国	996.2	65.8
ウクライナ	55.0	32.8	ウクライナ	488.6	35.6	ウクライナ	491.0	32.4
ブルガリア	19.7	11.7	ブラジル	227.3	16.6	ブルガリア	14.7	1.0
ブラジル	5.8	3.4	ブルガリア	49.0	3.6	ミャンマー	5.4	0.4
ミャンマー	0.2	0.1	ロシア	20.2	1.5	ロシア	4.2	0.3
メキシコ	0.0	0.0	ミャンマー	17.5	1.3	ラオス	2.5	0.2
その他	0.0	0.0	その他	12.0	0.8	その他	0.5	0.0
計	167.9	100	計	1,371.2	100	計	1,514.5	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ウクライナ > 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 33.5%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、8 月の降雨と生育に適した気温から作柄が改善し、単収が上方修正されたことを受け、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度より 3.7%増の 28.0 百万トンとなったものの、侵攻前の 2021/22 年度より 33.5%減となる見通し。

USDA によれば、8 月の気温は平年より高く、地域差があるものの、概ね降雨に恵まれ作物の成熟が促進された。ただし、ウクライナ南東部と西中部では、8 月の降雨は平年より少なく、高温・乾燥がとうもろこしの単収に悪影響を与える可能性がある。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 5.8%増の 5.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、供給量の減少や主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 30.4%減の 19.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022 年 10 月から 2023 年 8 月までの間の輸出量は 2,658 万トン（海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる）。輸出先国は、中国（563 万トン）、ルーマニア（388 万トン）、スペイン（289 万トン）、イタリア（222 万トン）、エジプト（214 万トン）の順。

黒海穀物イニシアティブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された 2022 年 8 月 1 日から、停止された 2023 年 7 月 17 日までの間の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,687 万トン。輸出先国は、中国（546 万トン）、スペイン（328 万トン）、イタリア（145 万トン）の順。7 月 17 日にロシアが離脱を表明し停止後、再開については決定されていない。

現地報道によれば、黒海イニシアティブの履行停止により、鉄道、他国の港を活用するウクライナ産穀物の代替輸出ルートが検討されている。詳細は、P.8 小麦－ウクライナ参照。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は、2023 年 9 月 15 日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子のトランジットを除く輸入禁止の解除を決定した。ただし、同日、東欧 5 カ国のうちポーランド、スロバキア、ハンガリーの 3 か国は独自の規制の継続を表明した（9 月 15 日時点）。

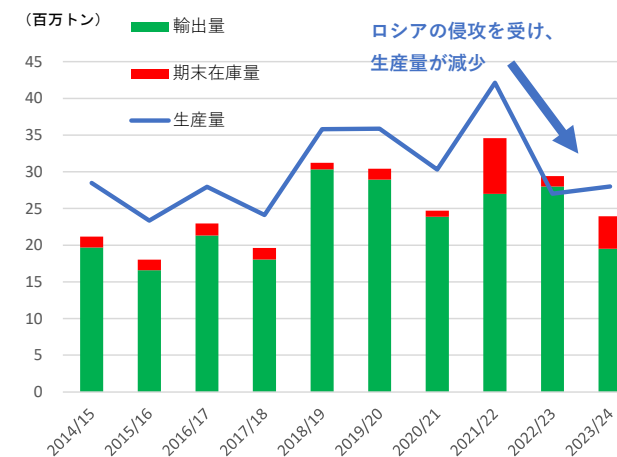
とうもろこし－ウクライナ

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 （見込み）	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、（ ）はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）
生 産 量	42.1	27.0	28.0	(27.0)	0.5	3.7
消 費 量	8.4	5.2	5.5	(6.3)	-	5.8
うち飼料用	7.2	4.0	4.5	(4.5)	-	12.5
輸 出 量	27.0	28.0	19.5	(18.0)	-	▲ 30.4
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	0.0	-
期末在庫量	7.6	1.4	4.4	(4.0)	0.5	214.2
期末在庫率	21.5%	4.2%	17.7%	(16.6%)	2.2	13.5
（参考）						
収穫面積（百万ha）	5.49	4.05	4.00	(4.06)	-	▲ 1.2
単収（t/ha）	7.68	6.67	7.00	(6.66)	0.12	4.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.9.12）をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

＜米国農務省（USDA）の見通し＞ 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・米国等で上方修正も、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。ただし、依然として史上最高の見込み。

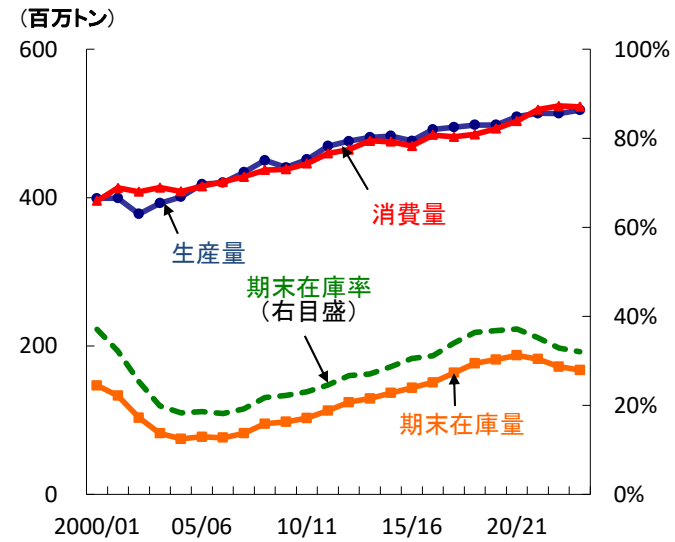
消費量 前年度比  前月比 

・インド、米国等で上方修正されたものの、ベトナム等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比  前月比 

・タイ、ベトナム、米国等で上方修正も、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」(2023.9.12)をもとに農林水産省にて作成

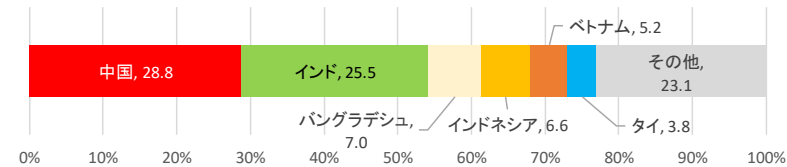
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

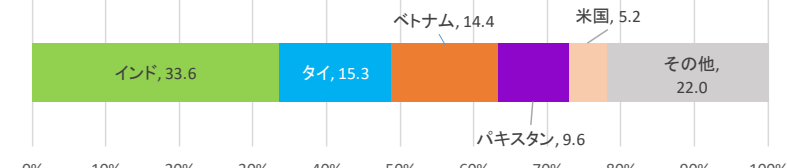
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.9	513.6	518.1	▲ 2.9	0.9
消 費 量	518.8	523.8	522.7	▲ 0.2	▲ 0.2
輸 出 量	56.9	54.3	52.2	▲ 0.8	▲ 4.0
輸 入 量	54.4	53.7	49.8	▲ 0.8	▲ 7.2
期末在庫量	182.4	172.2	167.6	▲ 4.2	▲ 2.7
期末在庫率	35.2%	32.9%	32.1%	▲ 0.8	▲ 0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 September, 2023)

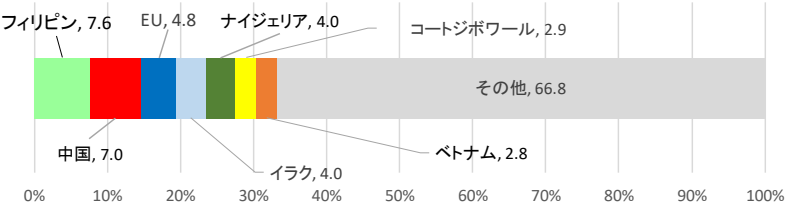
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(518.1百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(52.2百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(49.8百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2023/24 年度の生産量は収穫面積・単収の増加で前年度比 37.7%増

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、収穫面積の拡大及び単収の増加から、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度比 37.7%増の 7.0 百万トンと、2020/21 年度以来の高水準となる見込み。なお、単収（8.69 もみトン／ヘクタール）は史上最高値。また、中・短粒種の生産量は 2.2 百万トンと、前年度比で 2.1 倍となっている。

同「Crop Progress」（2023.9.18）によれば、9 月 17 日時点で主要生産 6 州の収穫進捗率は 57%と、前年同期（43%）及び過去 5 年平均（47%）を上回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、増産による供給量増加の見込みから前月予測より 0.2 百万トン上方修正され、前年度比 11.3%増の 5.1 百万トンと、史上最高の見込み。

2023/24 年度の輸入量は、主にタイとインドからの香り米の直近の輸入が予想を上回ったことから、前月予測よりわずかに上方修正されたものの、国内の生産量増加に伴う中・短粒種の輸入減少から、前年度比 2.4%減の 1.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、国内生産量の増加と、それに伴う価格低下の見通しから、前月予測より 0.2 百万トン上方修正され、前年度比 32.4%増の 2.7 百万トンの見込み。

USDA 「Rice Outlook」（2023.9.14）によれば、9 月 12 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、砕米 4 %混入）の価格は 760 ドル/トンと、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値が本年 1 月末より続いている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。地中海向けカリフォルニア米（1 等、砕米 4 %混入）である中粒種の価格は 1,650 ドル/トンと、史上最高の価格水準が前年 12 月末より続いている。

なお、米国産米の国内農家出荷価格は、新穀の供給量の増大見込みから、長粒種、中・短粒種いずれも前月から下落した。長粒種の価格は 15.0 ドル/cwt（330.7 ドル／トン）と、前月から 0.5 ドル/cwt（11.0 ドル／トン）の下落。中・短粒種の価格は 22.6 ドル/cwt（498.2 ドル／トン）と、前月から 2.2 ドル／cwt（48.5 ドル／トン）下落した。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4

(単位：百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 8 月～24年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	5.1	7.0	0.5	37.7
消 費 量	4.8	4.6	5.1	0.2	11.3
輸 出 量	2.7	2.0	2.7	0.2	32.4
輸 入 量	1.2	1.3	1.2	0.0	▲ 2.4
期末在庫量	1.3	1.0	1.4	0.4	42.7
期末在庫率	17.0%	14.4%	17.5%	4.2	3.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.01	0.88	1.15	0.08	30.7
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.69	0.06	5.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 September, 2023)

写真：アーカンソー州の収穫状況の風景(8月 23 日撮影、短粒種)



撮影者：ケネス・グラベス氏（アーカンソー州コメ生産者協会会長）

< インド > 8月は過去30年間で最も乾燥し、カリフ米の生産量は減少見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、8月の極度の降雨不足から、インドのコメ生産量の85%を占めるカリフ米の単収の減少が予想されるため、前月予測から2.0百万トン下方修正され132.0百万トンと前年度比で2.9%減も、過去5年平均(125.0百万ト)を5.6%上回る見込み。単収は、前月予測から0.07もみトン/ヘクタール下方修正され、4.21もみトン/ヘクタールと前年度比で1.6%減も、過去5年平均(4.12もみトン/ヘクタール)を2.2%上回る見込み。

8月は過去30年間で最も乾燥した天候となったが、北東部の稲作地帯のみ、平年並み又はそれを上回る降雨となった。なお、9月上旬からインド全土でモンスーンによる平年並み又はそれを上回る降雨があり、中旬には豪雨も見られた。これを受け、生育期中盤の作物の土壌水分の増加により、乾燥の影響が緩和され、乾季作に向けた貯水量も改善する見込み。

インド農業農民福祉省によると、カリフ米の作付済み面積は、9月15日時点で40.94百万ヘクタールと、降雨不足で作付けが遅れた前年同期(39.86百万ヘクタール)に比べ1.08百万ヘクタール多く、5年平均(2017/18年度～2021/22年度)の39.95百万ヘクタールを約1.00百万ヘクタール上回る。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測より0.5百万トン上方修正されたものの、生産量の減少予測から、前年度比0.4%減の115.5百万トンの見込み。なお前年度に引き続き、政府の低所得世帯向け(約8億人が対象)にコメ等が配給される見込み(2022/23年度は58百万トンと消費量の半分に相当)。

2023/24年度の輸出量は、生産量減少の予測に加え、輸出規制の強化から、前月予測から1.5百万トン下方修正され、前年度比16.7%減の17.5百万トンの見込み。ただ依然として世界第1位の輸出国で、世界の輸出量の34%を占める。

なお、インドは、①2022年9月9日に、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制するため、碎米を輸出禁止とするとともに、中近東向け等に輸出されるバスマティ米(香り米)やパーボイルド米(蒸米)以外のコメに輸出税を賦課(20%)する輸出規制を発動。更に、②上昇が続く国内価格の更なる抑制と国内向け供給量確保のため、本年7月20日にバスマティ米・パーボイルド米以外の精米の輸出を禁止。③8月25日には、パーボイルド米の精米に輸出税を賦課(20%、同年10月16日まで)。また、④8月27日からバスマティ米の精米に最低輸出価格(1,200ドル/ト)を暫定的に導入。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2023.9.12)によれば、インド産米(碎米5%混入)の価格は、輸出規制強化後のデータが今のところないものの、規制前までの輸出価格は485ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で依然として最低水準の価格となった(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

2023/24年度の期末在庫量は、前月予測から4.0百万トン下方修正され、前年度比3.0%減の32.0百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位:百万精米トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	129.5	136.0	132.0	(133.0)	▲ 2.0	▲ 2.9
消 費 量	110.5	116.0	115.5	(114.0)	0.5	▲ 0.4
輸 出 量	22.0	21.0	17.5	(16.5)	▲ 1.5	▲ 16.7
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫量	34.0	33.0	32.0	(34.9)	▲ 4.0	▲ 3.0
期末在庫率	25.7%	24.1%	24.1%	(26.8%)	▲ 2.8	▲ 0.0
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.28	47.70	47.00	(47.00)	-	▲ 1.5
単収(もみt/ha)	4.20	4.28	4.21	(2.88)	▲ 0.07	▲ 1.6

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 September, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (17 August, 2023) (単収は精米t/ha)

表:インドのコメ輸出規制

(2022年9月9日～)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの粳 (HS 1006 10)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t)	-
	1,200ドル/トンの最低 輸出価格導入	2023.8.27～
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税 (20%)	2023.8.25～ 2023.10.16
バスマティ米・パーボイ ルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20～
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9～

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場
は、輸出を許可。
※有機米は本措置の対象外。
資料: インド政府の公示等をもとに農林水産省にて
作成。

< 中国 > 一期作稲、南部の二期作晩稲の生育は順調

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度の干ばつから回復して収穫面積が増加し、史上最高の単収が見込まれることから、前年度比2.1%増の149.0百万トンと、史上最高となる見込み。なお東北部では、政府の大豆作付け推進政策の反動を受け、コメの作付面積が減少傾向にある。

中国中央气象台（2023.9.4）によれば、8月末現在、①一期作稲は、東北地区と長江中・下流域の大部分が乳熟期にあり、また、江蘇省の一部では穂ばらみ期と出穂期に入っている。西南地区の大部分は乳熟期で、一部地域では収穫が開始されている。ほとんどは平年並みか、若干早いペースで生育しており、2023年の生産量は前年並みの見込み。②二期作晩稲は、大部分の長江下流域が節間伸長期から穂ばらみ期の段階にあり、地域によっては出穂期に差し掛かっている。華南地区の大部分は分げつ期から節間伸長期の段階。大部分は平年並みか、若干早いペースで生育しているものの、湖南省、江西省は約1週間遅れている。2023年の生産量は前年並みの見込み。

なお、二期作早稲米の収穫は終了した。国家統計局の「2023年早稲収量データ」（2023.8.23）によると、収穫面積は減少も、単収の増加から、総生産量は28.3百万もみトンと、前年から0.8%増加した。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2023.9.19）によれば、8月の降水量は概ね平年並み又はそれを上回る降雨があった。9月上旬に大部分の地域が乾燥した天候となったが、同中旬には長江南部で降雨があり、生育期の終盤にある二期作晩稲の生長に好条件となった。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこしの前年度並みの生産見込みを受けた飼料用米の消費量の減少から、前年度比1.9%減の152.0百万トンの見込み。

2023/24年度の輸入量は、特にベトナム、インド等からの直近の輸入量の減少から、前月予測から0.5百万トン下方修正され、前年度比20.1%減の3.5百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2023年7月の輸入量は10.1万トン（前年同月比83.9%減）、1～7月の輸入量は190.6万トン（前年同期比54.5%減）となった。

なお、中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は減少している。

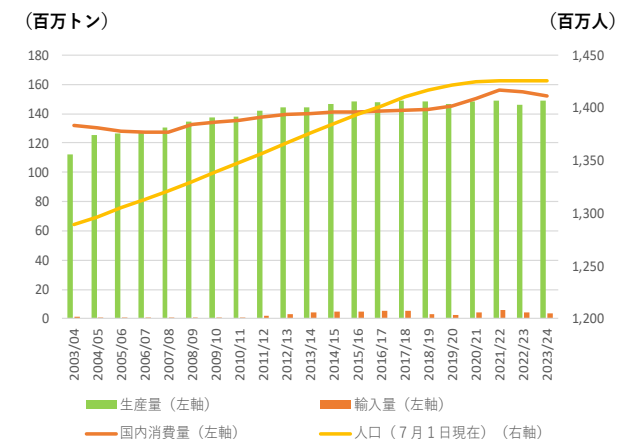
コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	149.0	146.0	149.0 (148.9)	-	2.1
消費量	156.4	155.0	152.0 (151.0)	-	▲ 1.9
輸 出 量	2.1	1.7	2.0 (2.2)	-	14.9
輸 入 量	6.0	4.4	3.5 (4.0)	▲ 0.5	▲ 20.1
期末在庫量	113.0	106.6	105.1 (104.9)	▲ 0.5	▲ 1.4
期末在庫率	71.3%	68.0%	68.2% (68.5%)	▲ 0.3	0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	29.85 (29.45)	-	1.4
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.13 (4.96)	-	0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September, 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August, 2023)（単収は精米t/ha）

図： 中国のコメ生産量・消費量・輸入量と人口の推移（2017－2023年）



資料：USDA「PS&D」（2023.9.12）及び国連「World Population Prospects 2022」をもとに農林水産省にて作成。なお2022年、2023年の人口は予測値。

< タイ > 今後の乾季米向け灌漑用水の不足から減産の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、本年5月の雨季の開始の遅れと、5～8月の降雨不足により、今後の乾季米向け灌漑用水の不足が見込まれることから、前月予測から0.2百万トン下方修正され、前年度比6.7%減の19.5百万トンの見込み。

2022/23年度の実産量は、タイ政府によれば収穫面積予測が上方修正され、11.07百万ヘクタールと史上最高となる見込み等を受け、前月予測から0.7百万トン上方修正され、2021/22年度比5.0%増の20.9百万トンの見込み。

8月は、特に雨季米の主要産地であるタイ北東部において降雨不足となり、いくつかの地域では平年比70%以下の降雨となったほか、北部でも過去30年で最も乾燥した月となり、平年比25%～75%の降雨となった。他方で、9月に入りタイ全土で降雨があり、平年以下だった今後の乾季米用の灌漑用水貯水量に回復がみられ、土壌水分量も改善した。

アセアン食料安全保障情報システム(2023.9)によると、雨季米は現在、幼穂形成期にあり、作付け進捗率は予定面積の60%となっているが、タイ全土の降雨不足により作付面積が平年比で20%減少する見込み。8月末まで大部分の地域で干ばつが続いたことから、生育状況は不良又は立ち枯れとなり、7万ヘクタールが影響を受けたと推測されている。これを受け、前年に比べ単収及び生産量も減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、インドの輸出規制による代替需要の発生から、前月予測から0.5百万トン上方修正されたものの、生産量の減少見込みから、対前年度比5.9%減の8.0百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22年度比10.4%増の8.5百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023年1～7月の輸出量は、前年同期比13.5%増の464.4万トンとなった。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の2.3万トンから大幅増の71.8万トン、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは64.4万トン（前年同期79.0万トン）となった。そのほか、南アフリカが50.7万トン（同42.7万トン）と増加している一方、米国は39.1万トン（同42.5万トン）と減少。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.9.12）によれば、9月12日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、価格上昇による買い控えにより、前月から13ドル/トン下落し、643ドル/トンとなった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万米トン）					
年 度	2021/22	2022/23 （見込み）	2023/24（24年1月～24年12月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.9	20.9	19.5 (21.1)	▲ 0.2	▲ 6.7
消 費 量	12.7	12.7	12.5 (12.8)	-	▲ 1.6
輸 出 量	7.7	8.5	8.0 (8.8)	0.5	▲ 5.9
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
期末在庫量	3.5	3.3	2.3 (3.9)	0.2	▲ 28.9
期末在庫率	17.3%	15.5%	11.4% (18.0%)	0.8	▲ 4.1
（参考）					
収穫面積(百万ha)	10.70	11.07	10.60 (10.85)	-	▲ 4.2
単収(もみt/ha)	2.81	2.86	2.79 (1.86)	▲ 0.03	▲ 2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September, 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August, 2023)（単収は精米t/ha）

表：タイの国別輸出量

（単位：万トン）			
国名	2022 年 1～7月	2023 年 1～7月	増減量
1 インドネシア	2.3	71.8	69.5
2 イラク	79.0	64.4	-14.6
3 南アフリカ	42.7	50.7	8.0
4 米国	42.5	39.1	-3.4
5 中国	33.4	21.2	-12.2
6 日本	17.3	20.2	2.9
7 カメルーン	7.4	15.0	7.6
8 セネガル	13.8	14.6	0.7
9 バングラデシュ	0.0	11.5	11.5
10 モザンビーク	11.6	9.5	-2.1
計	409.2	464.4	55.2 (前年比13.5%増)

資料：タイ米輸出業者協会（2023.9）

< ベトナム > 北部の雨季米の生育状況は良好、南部の雨季米は収穫期

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が過去最高だった前年度の水準を維持する見込みから、前年度並みの 27.0 百万トンの見込み。なお、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量は史上最高となった 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に、緩やかな低下傾向にある。

2022/23 年度の実産量は、前月予測から変更はなく、2021/22 年度比 1.1%増の 27.0 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.9）によると、①北部では夏秋作（雨季米）が幼穂形成期から登熟期にあるが、灌漑用水が十分なため、作柄は良好。②南部では、夏秋作（雨季米）が収穫期にあるが、単収は前年度と同水準（約 5.7 トン／ヘクタール）の見込み。③南部の秋冬作（雨季米）は良好な生育条件の下、成長期にある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、競争相手であるインドの輸出規制強化（2023 年 7 月 20 日～）により、ベトナムへの代替需要が発生することから、前月予測より 0.2 百万トン上方修正された。しかし、インドネシアへの備蓄向け輸出が年内に終了する見込み等から、前年度比 6.3%減の 7.5 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量も、競争相手であるインドの輸出規制強化による代替需要の発生から、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、8.0 百万トンの見込み。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～8 月の輸出量は、インドの輸出規制による代替需要と国際価格上昇による収益率の改善から、581.4 万トンと、前年同期（479.3 万トン）に比べ 21.2%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（234.5 万トン）、中国（78.6 万トン）、インドネシア（71.8 万トン）、ガーナ（42.3 万トン）の順となっている。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.9.12）等によれば、ベトナム産米（長粒種、5% 碎米混入）の 9 月 12 日までの週の価格は、前月の価格から 1 ドル/ト下落して 643 ドル/ト。背景には、最大の輸出先国であるフィリピン（ベトナムのコメ輸出の 9 割を占める）が、インフレ抑制のためにコメ流通価格の上限を設定したことで、輸入価格との差による損失を懸念したフィリピンの輸入業者がベトナム産米の買付契約をキャンセル・延期したこと等が指摘されている。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

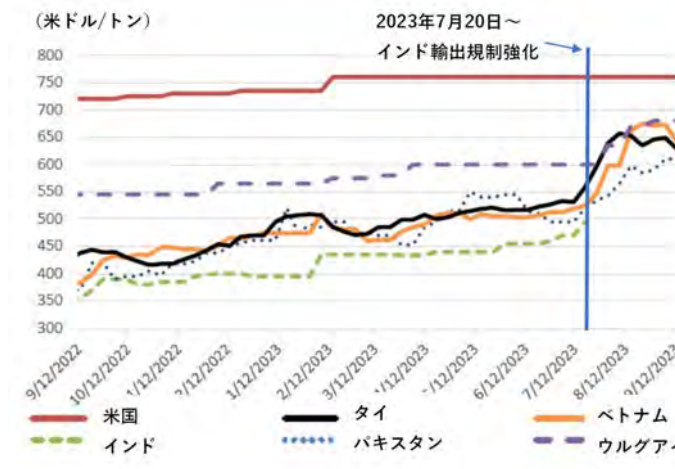
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1月～24年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	26.7	27.0	27.0 (28.0)	-	-	
消 費 量	21.5	21.4	21.3 (22.0)	▲ 0.2	▲ 0.5	
輸 出 量	7.1	8.0	7.5 (7.8)	0.2	▲ 6.3	
輸 入 量	1.7	1.5	1.4 (0.8)	-	▲ 6.7	
期末在庫量	2.5	1.6	1.2 (2.0)	-	▲ 25.6	
期末在庫率	8.6%	5.3%	4.0% (6.6%)	-	▲ 1.3	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.10	7.16	7.16 (7.10)	-	-
単収(もみt/ha)	6.01	6.03	6.03 (3.90)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September, 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August, 2023)（単収は精米t/ha）

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.9.12）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

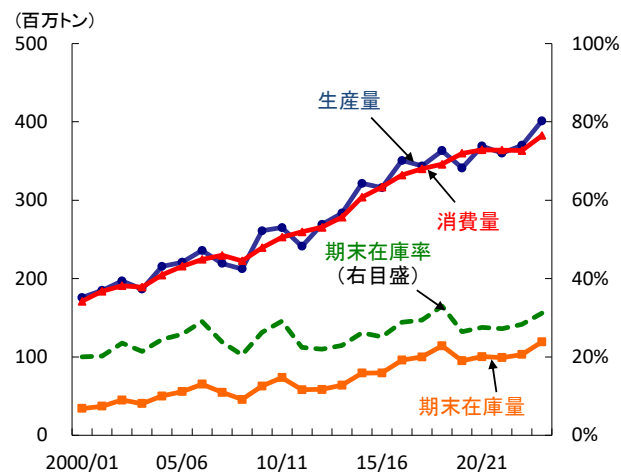
消費量 前年度比  前月比 

・中国等で上方修正されたものの、アルゼンチン、パキスタン、米国、EU等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・ブラジル等で上方修正されたものの、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2023.9.12）をもとに農林水産省で作成

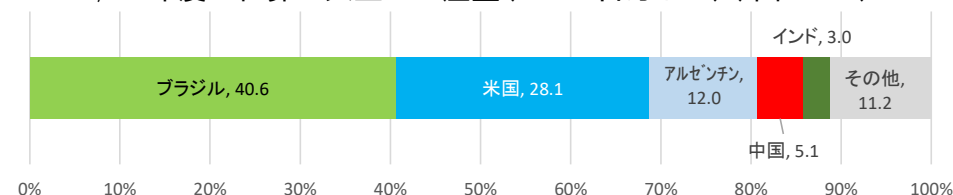
◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

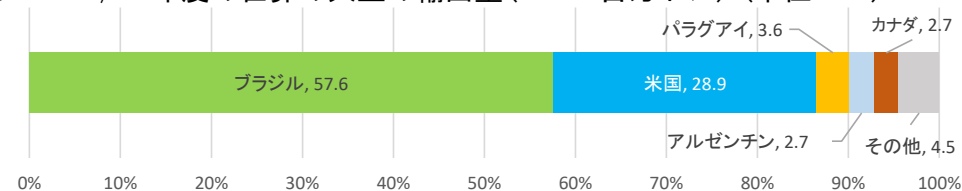
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	360.1	370.1	401.3	▲ 1.5	8.4
消費量	364.0	363.4	382.6	▲ 1.3	5.3
うち搾油用	314.5	311.7	327.7	▲ 1.8	5.1
輸出量	153.9	170.1	168.4	▲ 0.4	▲ 1.0
輸入量	156.6	167.3	166.0	▲ 0.3	▲ 0.8
期末在庫量	99.1	103.0	119.3	▲ 0.2	15.8
期末在庫率	27.2%	28.3%	31.2%	0.1	2.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 September 2023）

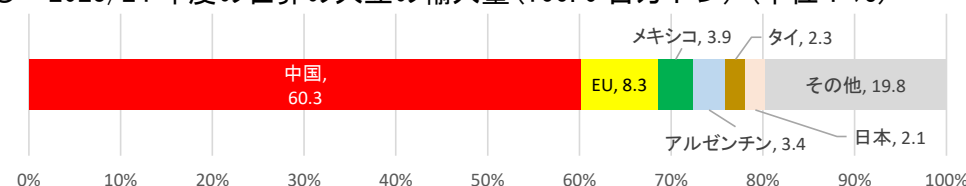
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量(401.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量(168.4 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量(166.0 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 単収の引下げを受け、生産量は 1.6 百万トン下方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実績調査によれば単収が前月予測から 0.08 トン/ヘクタール引き下げられたため、前月予測から 1.6 百万トン下方修正され、収穫面積の減少により前年度より 3.0%減の 112.8 百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」(2023.9.18)によれば、主要 18 州における 9 月 17 日現在の落葉進捗率は 54%と、前年同時期 (39%)、過去 5 年平均 (43%) をいずれも上回っていると同時に、収穫進捗率も 5 %と、前年同時期 (3%)、過去 5 年平均 (4 %) より進んでいる。他方で、作柄評価の「良～やや良」の比率は 52%となり、前年同時期 (55%) を下回っている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、供給減により前月予測から 0.3 百万トン下方修正されたものの、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 3.2%増の 65.8 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の下方修正による供給減により前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、前年度より 10.0%減の 48.7 百万トンの見込み。史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、単収の引下げを受け生産量が下方修正されたことにより、前月予測から 0.7 百万トン下方修正され、前年度より 12.0%減の 6.0 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前月予測から 0.5 ポイント減の 5.2%で、引き続き低水準に留まる見通し。

USDA によれば、2022/23 年度 (2022 年 9 月～2023 年 8 月) の輸出量は 52.2 百万トンと、前年度同時期の 57.0 百万トンより 8.4%減。内訳は中国 (31.2 百万トン)、メキシコ (4.6 百万トン)、ドイツ (3.2 百万トン) の順となっている。

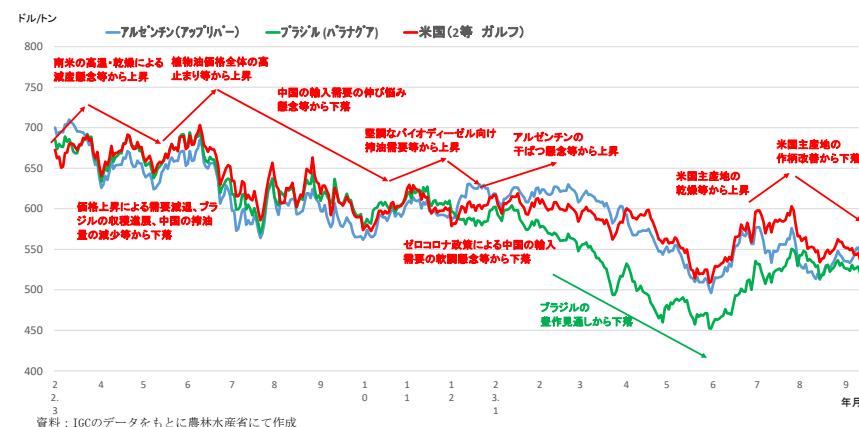
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 9 月～24年 8 月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	121.5	116.4	112.8	▲ 1.6	▲ 3.0
消費量	62.9	63.7	65.8	▲ 0.3	3.2
うち搾油用	60.0	60.4	62.3	▲ 0.3	3.1
輸出量	58.6	54.2	48.7	▲ 1.0	▲ 10.0
輸入量	0.4	0.8	0.8	-	-
期末在庫量	7.5	6.8	6.0	▲ 0.7	▲ 12.0
期末在庫率	6.1%	5.8%	5.2%	▲ 0.5	▲ 0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	34.93	34.94	33.47	-	▲ 4.2
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.42	▲ 0.08	2.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が史上最高となる見通しから、前年度より 4.5%増の 163.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2023.9.6）によれば、2022/23 年度の実産量は、前年度より 23.2%増の 154.6 百万トンと史上最高の見通し。最大生産州のマト・グロッソ州では、品種改良された種子の導入等の栽培技術の改善や良好な天候に恵まれ、増産となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料向けの大豆粕需要が増加することから、前年度より 5.1%増の 59.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出货量は、中国向け需要増により前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、生産量が 2 年連続で史上最高を更新し、価格競争力が高まる見込みから、前年度より 2.1%増の 97.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～8 月の輸出货量は 80.9 百万トンで、前年同期（66.6 百万トン）に比べ 21.5%増となっている。輸出先は、中国（56.7 百万トン）、アルゼンチン（3.7 百万トン）、スペイン（2.6 百万トン）の順。堅調な中国向け輸出に加え、干ばつにより減産したアルゼンチンへの搾油用需要を満たすための輸出が大幅に増加した。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ北部港とサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。南北鉄道が稼働することで、最大生産州のマト・グロッソ州等の内陸部で生産された大豆・とうもろこしを効率的に輸送し、輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

なお、「OIL WORLD Weekly」（2023.9.8）によれば、ブラジルの主要輸出港における出荷の遅れが発生しており、船舶の待ち時間が増大している。大豆は輸出のピークを過ぎたものの、冬とうもろこしの出荷と競合しているとみられ、輸出港のキャパシティについて引き続き注視する必要がある（P.11 ととうもろこしーブラジルの「図：ブラジルのとうもろこし・大豆輸出货量の推移（2023 年）」参照）。

大豆ーブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	130.5	156.0	163.0 (160.0)	-	4.5
消 費 量	54.0	56.8	59.7 (59.6)	-	5.1
うち搾油用	50.7	53.0	55.8 (56.3)	-	5.2
輸 出 量	79.1	95.0	97.0 (98.8)	0.5	2.1
輸 入 量	0.5	0.2	0.5 (0.3)	-	200.0
期末在庫量	27.6	32.0	38.7 (7.8)	▲ 1.5	21.1
期末在庫率	20.7%	21.0%	24.7% (4.9%)	▲ 1.0	3.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.60	43.90	45.60 (41.49)	-	3.9
単収(t/ha)	3.14	3.55	3.57 (3.86)	-	0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の大豆の作付けは、2022年9月以降、順次開始。
2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2023.9.6）

＜ アルゼンチン ＞ 2022/23 年度は、干ばつによる減産で輸入は史上最高

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度から回復する見通しから、92.0%増の 48.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2023.6.29）によれば、収穫が終了した 2022/23 年度の生産量は 21.0 百万トンと、過去 5 年平均（45.0 百万トン）より 53%減の低水準となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比 14.4%増の 41.8 百万トンの見込み。ただし、搾油量の引下げにより前月予測から 1.2 百万トン下方修正された。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 38.0%減の 5.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前回予測からの変更はなく、9.2 百万トンで史上最高の見込み。アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1 ～ 7 月の輸入量は 718.6 万トンで、前年同時期（249.7 万トン）の 2.9 倍。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 15.0%増の 4.6 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

なお、アルゼンチン政府は、8 月 28 日、干ばつで原料が不足している加工工場が稼働できるよう、大豆の外貨決済の新たなスキーム「75/25」を発表した。75%は公式為替レート（1ドル＝350 ペソ）が適用され、残りの 25%は優良スワップレート（大幅なペソ安のレート）で大豆の輸入に充てることができる（適用期間は 9 月中）。

大豆ーアルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	43.9	25.0	48.0 (44.0)	-	-	92.0
消 費 量	46.0	36.5	41.8 (42.8)	▲ 1.2	-	14.4
うち搾油用	38.8	30.3	34.5 (39.0)	▲ 1.8	-	14.0
輸 出 量	2.9	4.0	4.6 (5.1)	-	-	15.0
輸 入 量	3.8	9.2	5.7 (5.5)	-	▲	38.0
期末在庫量	23.9	17.6	25.0 (3.6)	1.1	-	41.8
期末在庫率	48.9%	43.5%	53.8% (7.5%)	3.7	-	10.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	15.90	15.00	16.40 (15.87)	-	-	9.3
単収(t/ha)	2.76	1.67	2.93 (2.77)	-	-	75.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August 2023)

表：アルゼンチン大豆輸入量、輸入先国
（7月は輸入ペースが落ちたものの、
対前年度同時期比で輸入量が大きく増加）

国名	2022/23年度 (2023年1～7月)		2021/22年度 (2022年1～7月)	対前年度 同時期比 (%)
	輸入量 (万t)	シェア (%)	輸入量 (万t)	
ブラジル	338.6	47.1	15.5	2,086.6
パラグアイ	352.3	49.0	139.5	152.6
ボリビア	24.3	3.4	20.5	18.3
ウルグアイ	0.8	0.1	67.7	-98.9
その他	2.6	0.4	6.6	-60.6
計	718.6	100.0	249.7	187.7

資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）のデータをもとに
農林水産省で作成。

< 中国 > 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収が減少するものの、収穫面積が増加することから、全体として前年度より 1.1%増の 20.5 百万トンで史上最高の見込み。

中国政府は、大豆の作付け拡大に向けた取組等を引き続き進めている。
なお、9 月上旬現在、主産地の東北地区の黒竜江省等では莢伸長期から子実肥大期を迎えている。

USDA によれば、9 月中旬に黒竜江省で降雨があり、大豆の生育に好影響を与える見通し。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、搾油需要が前月予測より増加する見通しから前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、国内の大豆粕及び食料の需要が増加することにより、前年度より 3.7%増の 119.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、大豆粕需要増によりブラジル産の輸入が増加する見通しから前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 2.0%減の 100.0 百万トンと高水準を維持している。

農業農村部によれば、2023 年 1～7 月の間の輸入量は、前年同時期より 15.0%増の 6,230.8 万トン。内訳は、ブラジル (3,891.0 万トン)、米国 (1,985.3 万トン)、アルゼンチン (154.7 万トン) の順となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 7 月号」によれば、7 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、前月（5,060 元/トン）から上昇し、5,120 元/トンとなった。7 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）も、前月（5,740 元/トン）から上昇し、5,760 元/トンとなった。市場における大豆在庫量が少ないことにも下支えされ、わずかに上昇した。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、2022/23 年度の輸入量が増加したことから前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 3.7%増の 39.2 百万トンで史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測から 0.6 ポイント上方修正され、前年度並みの 32.9%となる見込み。

大豆－中国

(単位：百万トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	16.4	20.3	20.5	(21.5)	-	1.1
消 費 量	108.4	114.7	119.0	(118.4)	1.0	3.7
うち搾油用	87.9	93.0	96.0	(98.0)	1.0	3.2
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	-
輸 入 量	91.6	102.0	100.0	(100.0)	1.0	▲ 2.0
期末在庫量	30.3	37.8	39.2	(36.4)	1.0	3.7
期末在庫率	27.9%	32.9%	32.9%	(30.7%)	0.6	▲ 0.0
(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.45	(8.40)	-	2.1
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.96	(1.95)	-	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2023)
IGC「Grain Market Report」(17 August 2023)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年 7 月			2023年 1 月～2023年 7 月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	922.8	94.8	ブラジル	3,891.0	62.4
ロシア	17.1	1.8	米国	1,985.3	31.9
米国	14.2	1.5	アルゼンチン	154.7	2.5
アルゼンチン	11.8	1.2	カナダ	93.1	1.5
ウルグアイ	3.8	0.4	ロシア	80.6	1.3
ベナン	1.2	0.1	エチオピア	7.9	0.1
その他	2.2	0.1	その他	18.2	0.1
計	973.1	100	計	6,230.8	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 作付面積の増加により、生産量は前年度から 2.7%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.9.25）によれば、2023/24 年度の実産量は、単収の引下げにより前月予測から下方修正されたものの、前年度から 2.7%増の 6.7 百万トン（見込み）。単収が 2.95 トン/ヘクタールと、高水準の単収だった前年度より低下するものの、収穫面積が 2.28 百万ヘクタールと前年度より 7.6%増と大幅に増加することによる。

USDA によれば、主産地のカナダ東部では、9 月 10 日～16 日にかけて降雨があり、生育に適した天候となっているとみられる。

カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアを占める。このほか、オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.5%増の 2.7 百万トンの見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 7.3%増の 4.6 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23 年度（2022 年 8 月～2023 年 7 月）の年間の輸出量は 311.6 万トンで、前年度（287.0 万トン）を上回っている。国別では、中国向け（128.8 万トン）が 41%を占め、続いてイラン（49.0 万トン）、アルジェリア（36.5 万トン）、イタリア（25.1 万トン）の順となっている。

なお、カナダ産大豆は、主産地が小麦や菜種と異なりカナダ東部のため、カナダ産の主要な輸送ルートは、五大湖を通過してパナマ運河から東アジアに輸出されるルートとなっている。

AAFC によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、供給減により前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、前年度から 14.3%減の 0.3 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

（単位：百万トン）

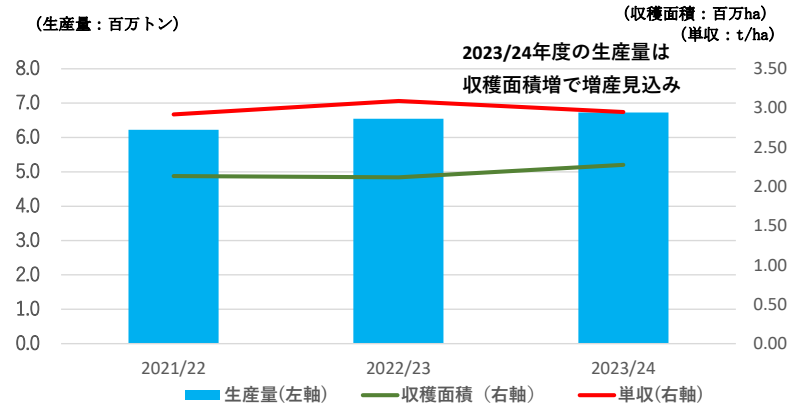
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年8月～24年7月）		
			予測値、()はAAFC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	6.2	6.5	6.7 (6.7)	-	2.4
消 費 量	2.3	2.6	2.7 (2.4)	-	2.5
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.9)	-	6.4
輸 出 量	4.3	4.2	4.6 (4.8)	-	7.3
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	-
期末在庫量	0.4	0.6	0.6 (0.3)	0.0	-
期末在庫率	6.5%	9.5%	9.0% (4.2%)	0.3	▲ 0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.25 (2.28)	-	6.1
単収(t/ha)	2.99	3.09	2.98 (2.95)	-	▲ 3.6

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 September 2023)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(25 September 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.9.25)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

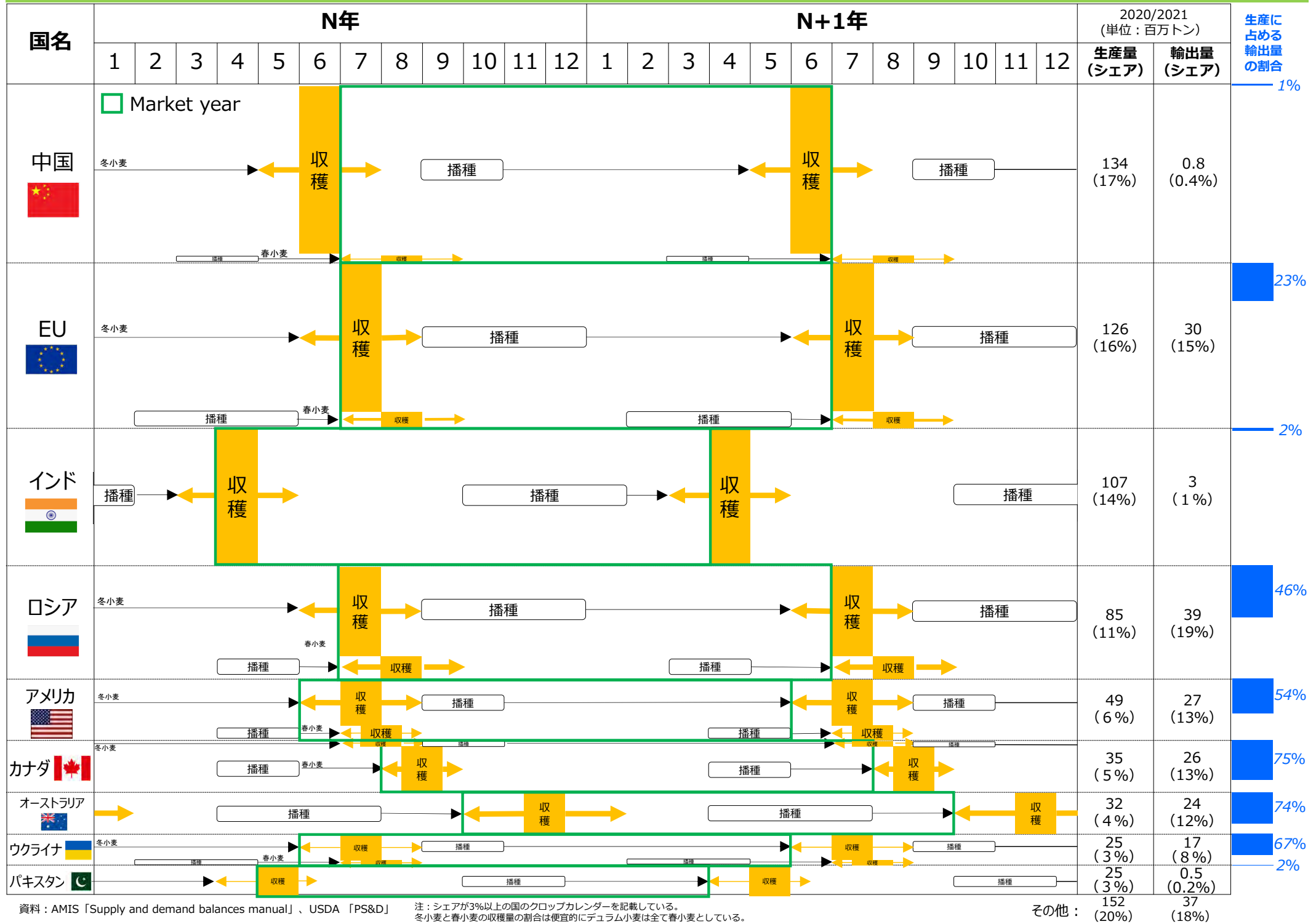
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



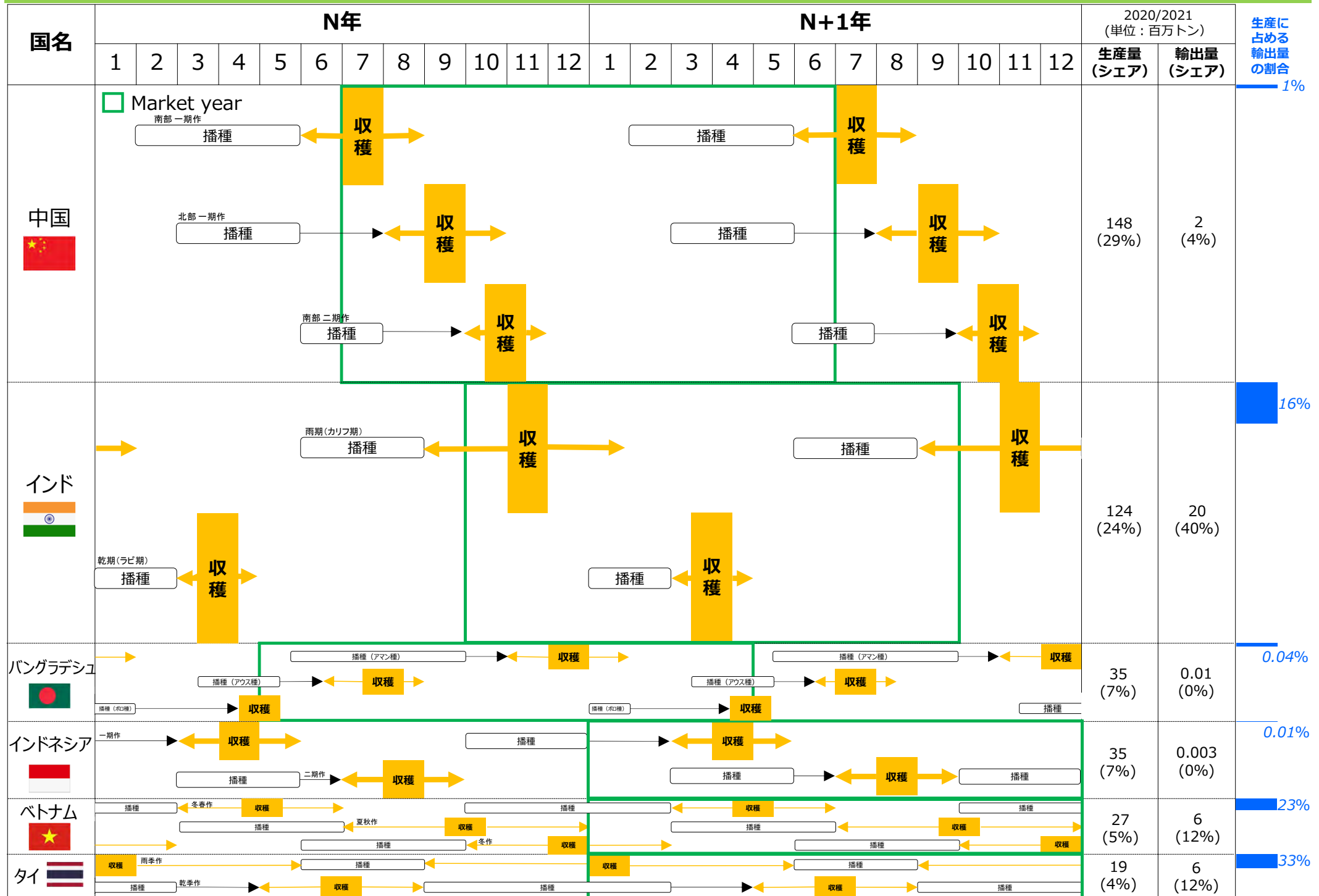
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他：

主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

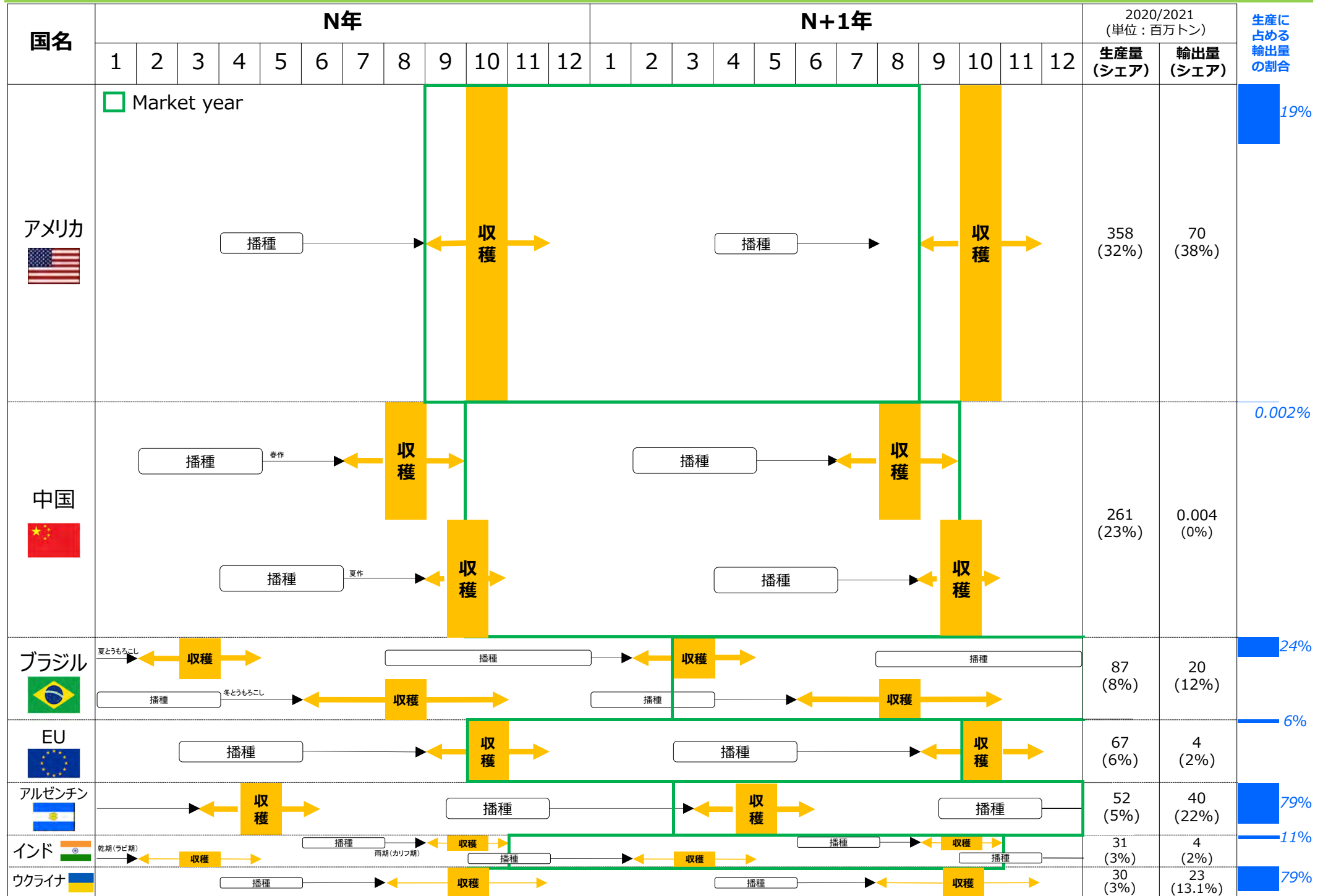
その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



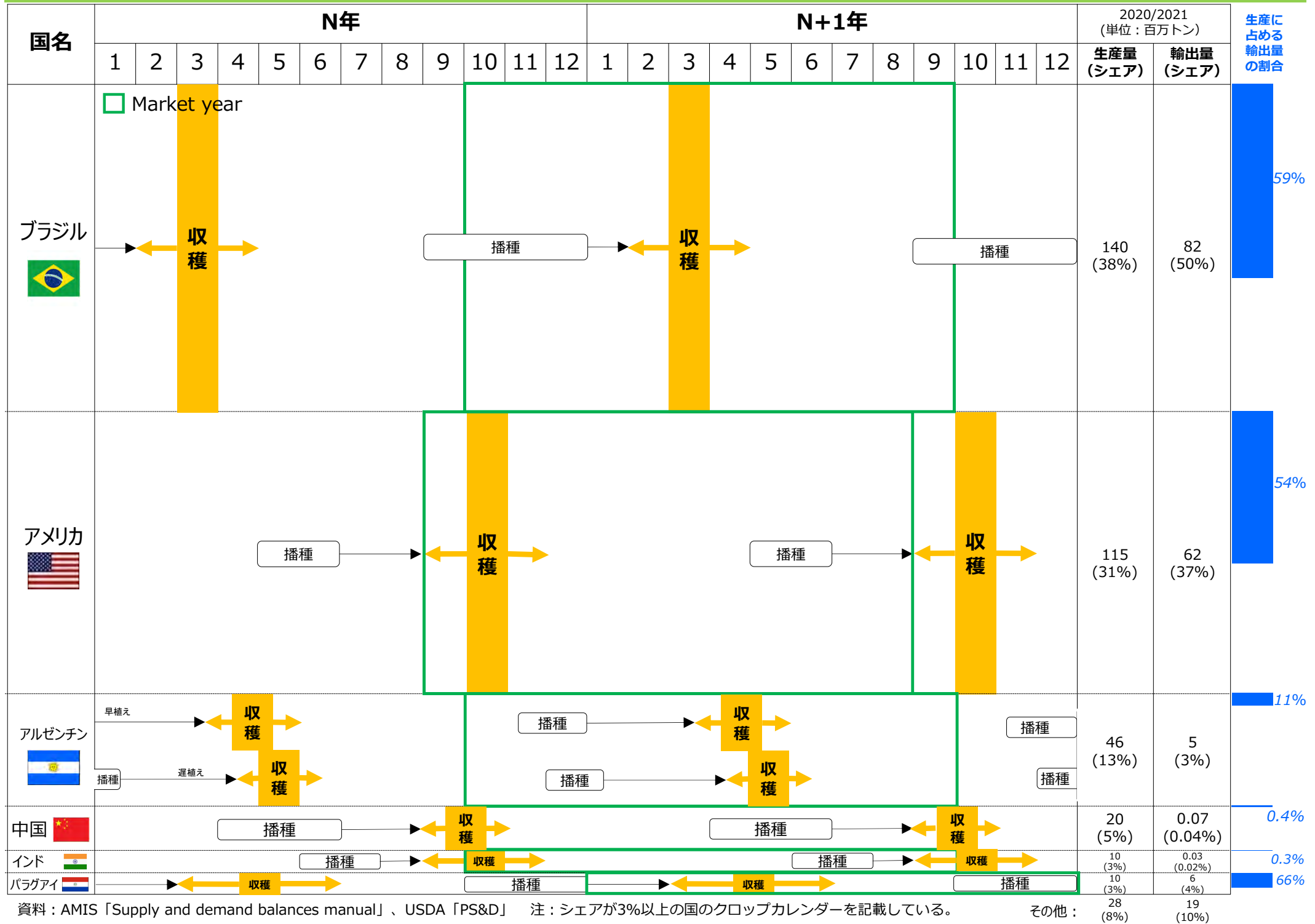
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242 (19%) 21 (11%)

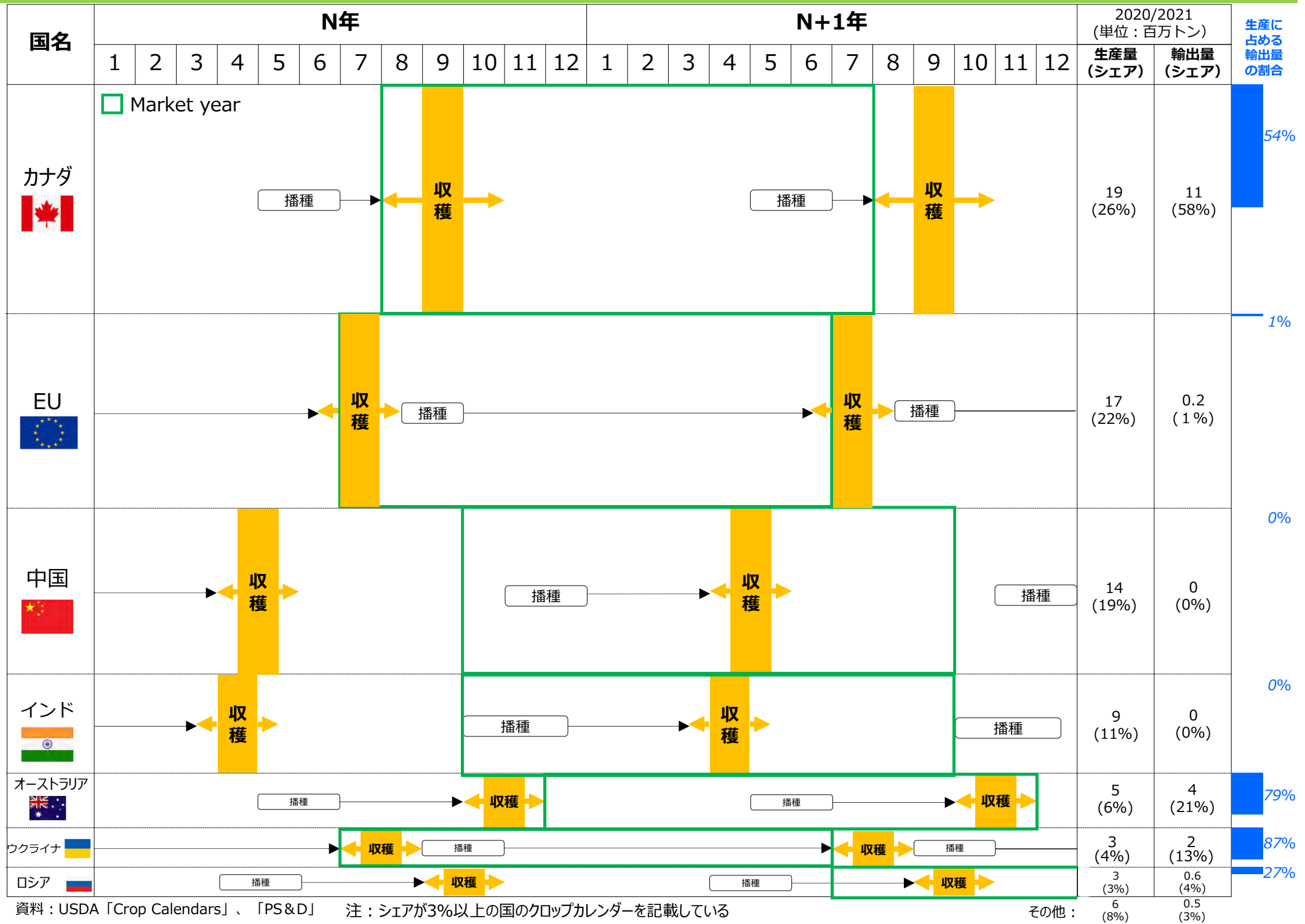
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロープカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 9 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）



ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html